

IF 5A34

鳴鶴山史藤田茂吉著

漁民偉業錄

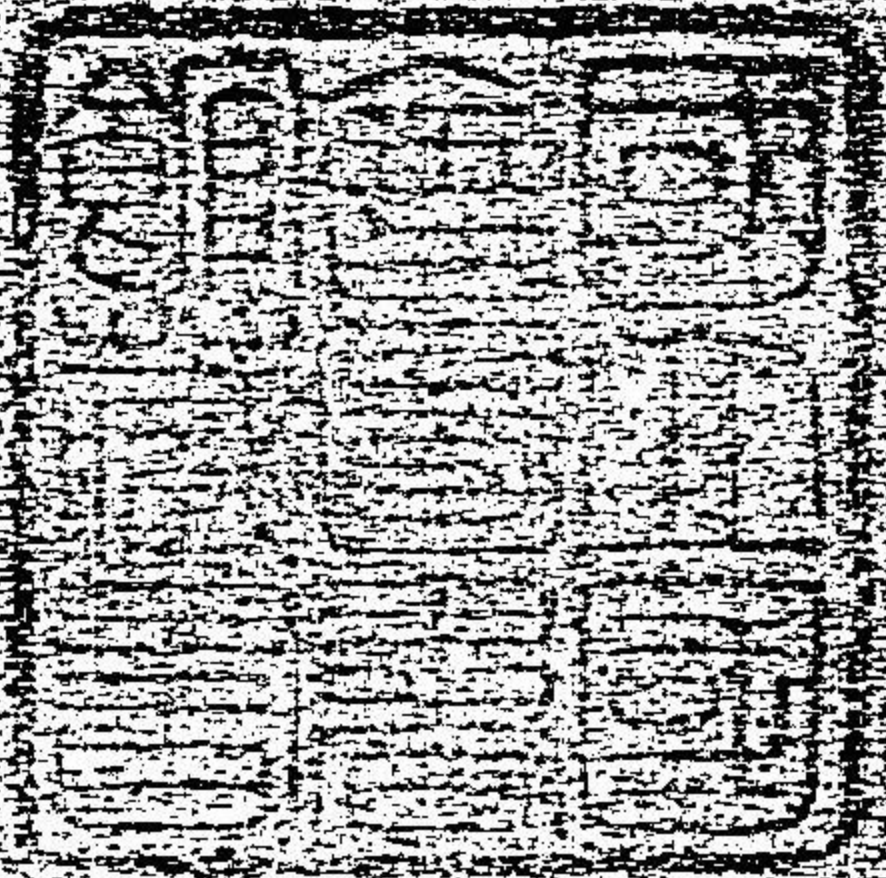
聞天樓叢書

159.2 H97/a

文章絕不出人情之
若夫作者激意之在
天以多情才子自矜識
之矣

明治丁亥春分節

古梅居士修題



337607

濟民偉業錄卷一

第一篇

第一回	豐城龍劍不能幾見	一
第二回	聰明似有天成質 聰啓何勞教化成	十一
第三回	痴兒不為天下奇 男子要為天下事	三十七
第四回	人情似紙張々々薄 世事如棋着々々新	五十七
第五回	黃鶴翅垂河燕雀 青松心在任風霜	七十五
第六回	一身多難虎為鼠 四海幾人蛇作龍	九十七

第十四回	第十三回	第十二回	第十一回	第十回	第九回	第八回	第七回
萬一古丹心日月懸	叔源汪洋萬頃波	人中難得九皋禽	四時多恨是春心	半窓晴日動遊塵	病葉狂花半綺筵	爭先徑路滋味長	可憐天上張公龍
二百五十九丁	二百二十七丁	二百五丁	百八十一丁	百六十五丁	百五十三丁	百三十九丁	百一十一丁

第二十二回	第二十一回	第二十回	第十九回	第十八回	第十七回	第十六回	第十五回
高才不免爲人忌	雪中砥柱元孤立	須知乾氣在此交	出谷鶯求喬木遷	泰山北斗千年在	鶴來應報碧桃春	花催行雲慘夜天	白屋可能無孺子
四百四十七丁	四百三十三丁	四百十七丁	三百九十三丁	三百四十五丁	三百二十三丁	三百〇七丁	二百九十一丁

第二十三回

賢愚可在眼中窺

四百六十三丁

第二十四回

橫海長鯨困漢涼
垂天巨翼落樊龍

四百七十三丁

第二十五回

近水樓臺先得月
向陽花木易為春

四百八十五丁

第二十六回

帶得一天新雨露
歸除五縣舊塵埃

五百一丁

第二十七回

蠓鵬變化離海
鸞鶴程途在天

五百十九丁

濟民偉業錄卷一

藤田鳴鶴 著

第一篇

第一回

滄海龍珠不能幾見
豐城龍劍不終藏



森田思軒曰如此起
來不苦費力却是單
刀直入令讀者先目
忙不遇轉脚則甚費
力過蘇眉山韓廟神
文關手寥寥二句乃
夏了室中幾十遍走
作者授此一節亦未
知要了幾十遍走
犬養木堂曰起手陪
通題意

一條の小徑樹間を穿ち遙か曠野に連なる徑の側に細
流あり徑と共に迂回せり天然の流洑にあらずして田畝の
灌漑に供する爲め人工もて穿ちたる溝渠と思はる流れに
沿へる土地は榛荆に蔽はれて一面の荒原をなしたるも
かに隴畦の痕跡を存するを見れば曾て人の耕せる田畝な
りしを知るべし蓋し兵火に罹りて農民業を失ひ他方に逃
れ遂に爲めに荒蕪に歸したるにあらずんば收斂の重きに
堪へずして民力全く竭盡し徒らに此の荒原を留めたるな

らん頃しも秋の晩に當り雲間に高く飛ぶ雁の影は途切れ、
て日も傾き露に咽びて鳴く蟲の聲も哀れに聞えけり今此
處に來かゝるは主従と覺ほしく一個は年紀二十三四季身長
は尋常よりも超れて高く眼眉秀剛直不撓の風采を容貌
のうちには表はせり一個は此少年の従僕なるべく年齢五十
計にて枯瘦たる老人なり何れより何れに行く旅客なるか
暫く木蔭に立ち休らいて少年は後方を見返り
少年 京師を去りしよりはや五、六
と指を屈めて數へながら何事をか口裏にて呟きつゝ
少年 家郷までは幾何の里程なりや
と老奴に問ひかけ頻りに思慮する所あるが如し
老奴 御在所までは最早僅かの路程なり七八里も候はんか

思軒曰馬頭米塵風
得人情之至乃今壁
國帶愁咽々是怪事
讀者亦益目忙

思軒曰不免西山高
士笑天眞喪盡得虛
名似愧實夸至春風

と語るを聞きて少年は一層憂愁に沈みて見よ差し俯いて
語なく恰かも郷國に入るを厭ふものゝ如し凡る人情家郷
を離れて馴れぬ異郷に客となれば憂愁は自ら之れに伴ふ
ものなるに況してや凄涼き秋の夕山色水聲目に見るもの
耳に聞くものいと悲哀を添ゆるなる客中の身に在りて
家郷の近きを聞かば其の身に纏ひたる憂愁も忽ち消去し
て喜悦の態を現はすべきに左は無く却て憂愁を添へたる
の必らず此人情にて推すへからざるの情由あるべし惟ふ
に此少年は自ら抱負する所ありて京師に入り睡手青雲を
心に期し志を立て、郷國を出てたるに科塲に敗を取りて
宿志を遂ぐる能はず徒しく憂鬱を携へて家郷に歸るもの
なれ、其愁苦の尋常旅客の愁苦にあらず家郷に入りて親

滿堂馬蹄疾一朝看
盡長安花而極矣明
祖制蕩罪浮於秦始
焚書樂舟名論千古
靡靡好個一部演義
明末史發端於落第
書生來自是帖切不
可易

思軒曰先寫劍光而

威故舊に對するの面目なきを苦むの一念胸中に充滿したるを以て人生最も愛慕すべき家郷も此人にありては囚獄に均しきの感あるべし少年の進まぬ歩みを自ら勵して行かんとしたる折しもあれ一群の賊徒後の方より追ひ來り矢庭に老僕を打ち倒し前に進みし二人の賊の少年に撃て掛り先づ其生命を奪ふて後所持の品物を攫らんと争ふたり少年も帯ひたる劍を抜き合せ暫しの禦き闘ひしが原來文弱の書生なれば數多の兇漢に敵せんようなく其腕の次第に亂れ數ヶ所の薄手を負ひにけり憫むべし少年は方さに賊徒の手に落ちて野末の露と消えんとす既に刃を打ち落され兇刃將さに身に及ばんとする時林の中より宛然流星の如く閃めき來る劍光の下に賊の一人は元を喪ひ今

後及人筆法出於水
滄志野緒林

思軒曰余嘗少壯涉
再城入幽燕之市觀
刀色皆如塗鈔刃厚
可目度視之日本刀
利錫何啻相倍蓋此
刀也歐陽永叔歌之
於前豐臣大國揮之
於後及胡蝶軍數弄
則斯習之矣僻邊窮
儒一見乃認書者亦
爲是耳
矢野龍溪曰開卷
一口の日本刀則ち
通篇の眼目

一人の肩頭より左股にかけて二片になりて倒れたり此有様に驚き呆れ茫然たる少年を背ろにして一個の壯漢三尺斗りの日本刀を提けて直立たり賊徒の之を見るよりも正しく鬼神の來降したるならんと恐れ慄き立つ足も無く逃げ散りしを見送りながら徐かに樹間に分け入りて三歳斗りなる小兒を抱き此時までも殆んど喪心したるか如き少年の前に進み横柄なる語調にて
某の今此處を通りかゝりし旅客なり汝の危急を見るに忍びず聊か一臂の勞を假したり汝が下僕の不幸にも賊の爲めに殺されたるの詮方なきとなりさて汝の弱腕にて其遺骸を仕末するとも叶ふまじ加之此處に長居せば賊徒の再襲も測り難し日暮れ途遠し前途を急ぐ身に

ては此上の助力も迷惑なり
 と言ひかけて更らに少年の面を熟視し氣の毒なりと思へ
 るか如き顔色にて倒れたる下僕を見返り
 マ、ヨ飢鴉、饑犬、、、、彼れ其葬地を少がさるべし
 と判然言ひ放ち極めて眞率なる語氣を以て
 汝の姓名を知るも要なし將た我姓名を告ぐるも益なし
 と言ひ果て去らんとせしが更らも少年の顔を詠めて
 汝の容貌の我眼に馴染あるが如くに覺ゆるは甚た奇な
 り
 斯く言ふうちにも始終少年の容貌を打ち掃りてありしが
 何か思ひ出せるか如き面容にて掻き抱きたる小兒を俯視
 し去らんと欲して未だ去らず猶ほも少年を熟視せり此時

木堂曰不欠此一句
 得

までも茫然として沈黙せる少年は稍くに我に返り
 恩人怒るし玉へ疾くに拜謝すべかりしを餘りの事に度
 を失ひ大人の震怒を犯せり
 と地に跪いて拜謝するを壯漢は扶け起して今度は殷勤に
 且親愛の情を帯ひたる音調にて
 足下は此より何れの地に行かんとするや
 少年 晩生は容城縣のものなり家は城外にあり
 壯漢 ナニ容城とや、ム、容城、、、、某も容城に行くもの
 なり然らば足下の路伴となり共に行途を急ぐべし
 と言ひかけて遠かわしげに小兒を懷より出たして少年の
 脚下に置き老奴の死骸をかき揚げて樹林の中に予馳せ入
 りけり少年は其眼前にある小兒が身動きもせず靜坐し己

田軒曰始點出地名

の顔を仰視て、笑を含み如何なる痛苦に遭ふも決して撓ま
ず如何なる艱險をも談笑の間に履み越えんといふが如き
快き面色にて宛かも己れを獎勵すか如くに見えければ覺
へず進み寄りて小兒の愛らしき手を把りて引起まかき抱
かんと去て双手を伸はし兩腋に腕を廻はし一搖り搖りて
持ち舉ぐるに其體量の極めて重く尋常五六歳の兒童にも
劣らざりしに少年は痛く驚き覺るす聲を發し

眞に英物なり、鳳雛々々

と叫ひし時壯漢は出て來りて

老奴の死體は帶をもて樹杪に結ひ附けたり容城々外は
此を距ると遠からず手疵も少し負ひしやうなれど薄手
なり氣遣なし行く々々足下と物語らんイザ共々に

思軒曰壯漢は何人
小兒は何物壯漢小
兒之與書生亦甚
瓜葛乃唯曰壯漢
書生似有些面善曰
且爾視小兒願曰掩
亦將前往容城縣一
起一按不即不離尤
見邊如之妙

と勸めつゝ笑ひながら小兒に向ひ

早く汝の食物と棲處とを得たきものなり

と言ひかけて少年の手より抱き取り憂愁に沈みて消へな
んとするが如き少年を勵ましながら容城さして立ち去り
けり

龍溪曰く余常に謂ふ文藻葩麗、余何う嗚呼兒を望まん但
た其規模結構に至ては尙ほ或は企て及ぶ可しと今此書
を看るに規模の宏遠、結構の雄大、則ち斯の如し余夫れ終
に白旗を樹るの人たらざるを得ざるか



第二回

聰明似有天成質
廻啓何勞教化成

大明世宗肅皇帝の嘉靖二十九年北京の政府に於ては嚴嵩父子事を用ひて恣まゝに威權を弄ひ朝廷の賞罰は全く嚴家より出るか如く嵩及び其子世蕃に諂ふものは才なきも榮位に昇り之れに逆ふものは或は貶謫せられ甚だしきは棄市せらる百官悉く嚴嵩の膝下に奔走し唯嵩あるを知りて天子あるを知らず朝廷の形勢斯くの如くなれば善政の行はれんやう無く州縣の事を司る大守縣令皆嚴嵩父子に結ひて其地位を固め嵩の意を承けて民を虐げ聚斂の巧みなるを以て良吏となし賄賂を受くるに敏なるもの即ち賢材ともてはやさる刑政斯く紊亂して人心の乖離するにあたり亂賊の蜂起するは是れ必然の勢にして外又は俺答を

始め倭寇の勢猖獗にして邊警常に絶ゆる隙無く内には草賊所在に出没して民物を殘害す朝政は久しき太平の後を承けて君相共に治平に馴れ漸く政事に倦んで只管姑息の計によりて一時の安を偷むに過ぎず朱氏の社稷は實に衰運の兆を現はしたり此歳の秋俺答入りて宣府を犯し薊洲(順天府に屬す)古北口(薊鎮に在り)に入り轉じて懷柔(順義の二縣を掠め遂に通州(順天府に屬す)に逼り更らに北河より東に渡りて直ちに京師に薄れり京師よては市民上を下へと騷擾して王師の追討を渴望せり朝廷は倭臣仇鸞を擧げて提督に任し俺答を征討せしめたり是れ亦鸞が嚴嵩父子に賄ふて得たる榮位にして鸞の意は敵と戰を開かんとするにはあらず其の兵を以て行々民の財貨を掠めて自ら肥

思野日第二回起手
與第一回似沒甚
交涉及今點出容
縣三字乃讀者亦有
些醒意了

又曰第一回只做個
楔子第二回以下幾
然將承脚一條草如
話頭承脚一條草如
擡別頭而一條草如
灰線德々起於其
問猶索西絲的等
筆法善則西洋的
又曰支那小說亦不
無之但彼則每每把
上仙界的做子自
然荒唐不切

さんとするに外ならず此時揚繼盛字仲芳といへる者あり容城縣(保定府にあり)の人にて嘉靖二十七年より京師に入り仕へて兵部員外郎に進み今茲三十六歳爲人剛直にして面折廷争を以て務となし日夜舌を爛して時事を論し知りて言はざるなく言ふて盡さるなく正議の名朝野に藉き姦臣の膽を寒からしむると數次なり一日朝より退きて其家に歸れば夫人張氏出て迎へて恰かも賓客を待つが如く禮儀作法も優雅に夫婦別ある有様は夫人の淑徳を表はしけり繼盛は夫人に向ひ阿雲は何れに在ると問ひけるに夫人は先程より書齋にて獨り讀書してあるよしを答へければ繼盛は朝服を解て便服に着替へ徐かに其兒の書室へと赴きたり

母舎オモヤを離れて數歩の外に幾株の花木を前に詠ナガメめ一豚の細流窓下に流れて最と閑靜なる書齋あり一榻一卓筆硯の外は架上ニ堆積せる數十卷の書冊と室の一隅に寄せ掛けし弓矢其他二三種の武器あるのみ此書齋の領主は即ち繼盛の一子にて楊雲字士龍と呼び身長は五尺五六寸通常の人より肥太なる方にはあらねど筋骨は健ツヨクかにて四肢シテ恰好ホトトギス達し双眸は漆の如く兩唇は紅絹を包めるに似たり其色は白哲其聲は清爽双眉の間には思慮深き人に往々現はるべき一種の風貌を帯ひ今茲十九歳の少年なるも尋常二十三歳の壯士と見ゆるばかりなり一見してその偉丈夫たるを知るべし緇きたる書は卓上にあるも眼は書物の上にあらず先程より沈思せる形カタチ様なりしが忽ち起て書を抛ち悲

憤に交へたる遊慢の語氣にて

天我を生して何事をなさしめんとするか

と言ひ出てしが又思ひ反へしたる面色にて

濟民々々、濟民之大業

思軒曰破題

と言ひ捨て、傍へを顧みれば其父の先程より此處ココにありしに心附きたり凡そ人の常として己れ獨りの外は知るものなしと思へる場合に思はず肝膽を吐き出せしを不圖他人に聞かれたる時は何となく慚愧を感ずるものなるに楊士龍は今此大言を發せしを不圖其父に聽かれ覺へず顔を見合せたる際にも猶ほ天は我を徒らタラに生せしにあらざと、自負したる先程の顔色を其まゝに持ち續けて、
父上の何時の間に此處に來玉ひしや

と徐かに言ひかけたり

繼盛は卓の傍らに坐を占めて徐かに其子の顔をながめ
 幾回か汝にも言ふ如く仕途に就きて力を效すは利祿の
 爲めにするにあらず又名聞の爲めにもあらず丈夫の功
 業を立て、徳澤を後世に傳ふるの道は仕官して朝に立
 つの外なしとは思はずや汝も知るが如く今ま朝廷には
 嚴嵩父子威權を専らにして上の聰明を蔽ひたてまつり
 小人黨を結んで正士を傷け綱紀紊亂して讒議全く滅絶
 せり汝の才識を以て其位を得ば妖氣を一掃して綱紀を
 皇張せんと難きにあらず若し然らんば汝の身にあり
 ては志を達して功を萬世に傳ふるの偉業なり又國家に
 取りては善政を得て士民堵に安するの大幸あり而して

其位を得るは制義の式を踐んで擧げらるゝの一法ある
 のみ余の言ふ従ひ科擧の事に意を用ひて試に應ずるの
 準備をなさんとを望むなり

と言ひ終りて楊雲が如何なる答をなすやらんと氣遣ふも
 のゝ如し楊雲は坦然として

父上認し玉へ進仕のとにつき兒は是れ迄幾度か父上の
 仰せありしにも拘らず常々判然たる對を爲さず今日ま
 ても御心を煩はしたり然るに兒は是迄少しく思ひ迷へ
 るとありて父上に確とれ對へ申すべき決心なかりしな
 りされども今は兒が將來の方向も定まりたれば父上の
 許可を得て兒の志を行ふ途に就かんと存せり
 と言ひければ繼盛は喜色忽ち面に溢れ

云 羅 ナニ仕途に就くとや左もあるべし
 否な仕途に就くには候はず父上願くは兒の申し上ると
 を寫と聞てし召されて若し理に適へりと思し召さハ兒
 の願ひを許したまへ兒は今更一愚人となるを欲せず否
 奸雄の術中に落ちて新たに愚人の群に入るとを好まず
 斯く申すは恐れ多きとながら大祖高皇帝制義を以て士
 を取るの法を設けられしは抑も天下の人を愚にせんと
 するの術にして秦の始皇が書を焚きしと其意を同ふし
 て其法を異にするものなり昔秦の始皇詐術を以て天下
 を取りしも智謀の士起ることあらば天下は其家の有に
 あらざるを憂ひ先づ智謀の根を絶たんと企て智謀の因
 て生ずる所は書籍にあるを以て之を焚て其源を塞ふは

天下は悉く愚人のみとなり我家に仇するものを生せし
 と信せしより焚書の策を施したるなりされども其策は
 極めて拙劣にて天下を愚にせんとするの形跡を明かに
 し人をして直ちに其心術を知らしめ其不正不理なるは
 常人と雖も直ちに之を判別するを得たり天下を愚に
 して天下の平安を保つ術は蓋し英雄豪傑の常に行は
 んと欲する所なるべし然れども始皇の如く明々地アカラサキに其
 術を施し直ちに書を焚て智計の源を絶たんとしたるは
 即ち却て天下を亂だして亡滅を招くの基を開きしに過
 きず我大祖天下を一統し士を取るの制を定めて唯四子
 書を講習し兼て一經に通ずるを標準となし八股文を以
 て之を試み其式に適應せるものは之を録して官を授く

即ち所謂制義の法なり此法は表面より之を見れば如何にも公平無私なるに似たり何ぞ知らん是れ全く英雄人を欺くの法にして天下を愚にするの術は寓せて此の中に存ざるを世人或は智謀才識の詩書に生ざるを知りて詩書は能く智謀才識を昏耗ならしむるを知らざれば世の有爲の士求むる所は利祿にあり望む所は權勢にあり利祿權勢は智謀の士の因て以て其志を達せんとするの要具なりさて之を得んとするには制義の門戸より進むの外なしされは日夜精神を傾けて攻修するは唯科塲の制式に充つべきものゝ外に出でず四書一經の外は目にだも觸れず博く才識を養ひ大に心膽を煉磨すべき材料を古今の史籍に求むる者なし故に人の才識智謀は遂

龍溪曰是れ東洋
古今讀書家の通弊
一言説破

思軒曰試以我前代
言志之在東流諸侯
大志之在得官徂
而仕於其宮有
之任御其政者
思之姑置其概
攀援形勢中概
之徒焉思得山
爲之徒焉思得
爲之徒焉思得

に詩書の中に吸ひ取られ詩書の爲めに昏耗の病に罹り有爲の精力全く竭き四書一經の外は之を講ずるの餘力なきに至れり既に書あれども之を讀むと無くんは書なきに異ならざ既に書なしとせば我より之を焚かざるも全く焚き捨てたるに同じ此に至りて天下を愚にせるの名無かして天下を愚にするの術自ら存せり今や人々榮爵利祿を求むるに汲々として智謀才識を詩書の中に傾け盡し復た他の書を讀むに暇あらず其聰明は八股の爲めに奪はれて大材を成すと能はず此の如きの徒假令志を得て官を得るも物の用に立つ可しとも思はれず况してや終身八股を耕ふし遂に不遇にして朽ち果つるもの滔々天下皆是なり是輩若し此に用ゆるの氣力を他に移

者亦以此官讀其冠
稿上一律云奇氣冠
儒流詩於樂府一頭
面文似蘇家出開生
脚踏山河六十字眼
空王額三稿字草堂
半夜稿牛

して大に其才藝を養はく智謀才識一世を震蕩するの士
となると無しと言ふ可らず然るに唯制義の法ありて有
爲の資を一小範圍の中に集めて以て人の聰明を奪ふ天
下を愚にするの術是れより巧なるは莫し又これより甚
たしきは無し彼の智謀才識あるの士は非常の事を行ひ
非凡の業を企て國家をして多事ならしめ汚腐陳敗せる
世上の氣風を掃清せんと務むるものなり是れ實に天下
の資を一家の用に充て天下の富を一身に享け唯平穩を
計る者の喜はざる所なり故に一人一家の平安を求むる
者より視れば智謀才識の士は其驕敵なり斯く申すも兒
は決して祖法を無するにはあらず唯一家の説を立て、
其利害を議するに過ぎず兒は夙くより此説を執るか故

制義の爲めに愚にせらるゝの不幸を遁れて八股の外に
逍遙し經國濟民の道に於ては孟子七篇中兒の則りて以
て施爲すべき項目尠からずと信せり兒が抱負する所を
行ふに當りては唯濟民の要道を求むるに過ぎず民は是
れ國の本々固ければ國安し國の安寧を求むるの正路は
民を安んずるの一途にあり兒は自ら分別あり又自ら方
策あり兒は今より四方を周遊し同志の人を得ば共に事
を謀り大に天下國家に盡す所あらんとを故に兒は大人
に對つて暫く兒を渺茫たる世海の中に見放ち兒の思ふ
がまゝに進退するの便宜を興へたまわんとを願はんとい
ふ兒の志す所は則ち右の次第にて到底今日朝廷の上に
立ちて正義を執り善政を施かんとは爲し得べき限りに

あらずと驚く自ら信する理由あればなり請ふ聊か其意を演へん抑も嚴嵩志を得て内閣に入りしより既に十年を經過せり嵩禮部尙書を以て武英殿大學士となり機務に參與せしは嘉靖二十一年にあり其黨與方さに朝廷に彌蔓し根帯極めて固く枝葉甚だ繁茂せり正義の士時に出るとあるも恰かも星晨の如し嵩の威炎赫々たるに壓伏せられ内外百執事建白して事を言ふ者は先づ嵩に白し其許諾を得て然後上聞するを例とせり苟も嵩の意に忤ふとあれば屏け去りて上奏せずされば嵩を稱揚し嵩の意を迎へたる奏議の外は天子の聴に入らず譬へば嵩は聖聽を支障せる隄防の如し忠言を聖主に進むるの路は全く杜絶せられたり滿朝の大臣皆嵩に阿諛して其爪

牙とならずんは則ち羽翼となり以て善類を刈るを務となせり數年來嵩を劾する者數十人に及べり而して或は貶謫せられ或は殺戮せられて一も身を全ふしたる者なし嵩の威權は益堅ふして正人の力は愈薄弱なり而して金帛珠玉の嵩の門に輻湊するは日に益々盛なり世蕃の如きは兇暴貪婪の無賴漢のみ固より取るに足らざる人物なれども嵩の奸黠なる能く之を利用して掠奪の具に充て家を全ふし妻子を保つの計を爲せり蓋し嵩の陰險は李林甫に劣れり又其奸智も秦儉に若かず而して嵩能く朝政を専らにするは大臣以下大材無きと嵩に一種の妙術あるに由るなり嵩の妙術とは何ぞや威權の名を避けて而して威權の實を收るの伎倆是なり嵩の事を爲す

世人の批評して悪となすものは己れ陛下の後へに立ちて其毀りを避け世人の認めて善となすものは己れ陛下の前に出て、其譽れを受け巧みよ善惡の途上に出没して世を瞞するの術あり是れ嵩の能く勢位を保つ所以なり朝廷の現形は斯の如し假令學識才幹一世に卓越するの人ありて朝に立つも單獨孤立の有様ならんには徒らに禍を招くに過ぎず幸にして二三正義の士志を與にすることあるも小人利を以て相結ぶの勢力鞏固なるも及ばざるは萬々なり決して奸黨を倒して其地を奪ふ能はざるなり斯く申す兒の意見にして誤らずんば正人は今日の朝廷に其身を容るゝ餘地なきを知るへし假令身を容るゝの餘地ありとするも其志を行ふの餘地を留めさ

るや明なり若し朝に立ちて爲すとあらんとすれば徒らに死を求むるに過ぎず又爲さゝらんとすれば僅かに活を求むるに外ならず兒の志は既に前にも申し上げたる如く僅かに活を朝廷に求むるとも又好んで死を朝廷に求むるとも爲すを好まず兒は唯兒の志を行はんとを願ふのみ大人の御身に就ては兒は敢て喙を容るべき儀には候はねと兒は大人の禍に逢はんとを恐れて常に苦心に堪へず願くは少しく御意を枉けられて徒らに禍を招くが如きと無からんと兒の切に願ふ所なり正論正理も言ふべき時と行ふべき地とを擇ばずんば有害無功に歸せんのと左は言へ大事を傍に見て黙すべき謂れ無ければ仕官の身に在りては死を願みず論争するの責あるべ

し大人剛直の性質にましましては、スズシ織毫の邪曲をも容るし
 たまわす抗争し漸く奸黨に忌まる、も位卑くして勢威
 未だ重からざるにより幸に禍を免かれたまへり左れど
 も直言の譽れ漸く高く名聲朝野に聞ゆるに至らば遂に
 奸黨の毒計にうゝらんと鏡に懸けて見るが如し大厦の
 將さに覆らんとする時一木能く支ゆべきにあらず直言
 正論は徒らに身に禍するのみにて世に益する所なきを
 知らば暫く朝を退ひて濟民の策を外に求むるの外無か
 るへし大人願くは幾微を明察したまひ進退去就に深く
 御注意あらんとを
 と辭を盡して論辯し當時の形勢を説破して其身を處する
 方向を定め又其父の過激を諫め更らに餘蘊も無き程に詳

思軒曰士龍一片機
 概是見士龍人品是
 見叔明時勢則和盤
 托出之妙

らに意見を吐露せしかは繼盛も感歎して
 汝の識見の高尙なるは乃父の及はざる所なり汝が四方
 に周遊して其志を行はんとするとも固より間然すべき
 所なし汝の智謀と勇氣に資らは汝は大業を遂げ得べし
 若し然らんには汝が父も冥府にて喜はれん余も亦思人
 の高誼に報ふる時を得て悦ひ此に増すものなし
 と覺へず語るを聞き答め
 汝の父とは、、、、又思人とは
 余は汝の實父にあらず汝は余の猶子なりとばりにて
 は事の仔細を知る由無ければ某が汝を養ひ取りて子と
 なせし初より汝の素生を語るべし今を去ると十六年前
 余が廿三歳の年なりき試に應せんため遙々京師に出て

思軒曰如此逆施入
 港來我戲曲多是手
 段

たるが落第して望を失ひ郷里を指して歸る路數多の山賊に取圍まれ從僕は命を失ひ某は賊と戦ひ暫しの程は支へしかど身一個にて大勢に當るべくもあらざれば賊徒の爲めに薄手を負ひ既に危き其折柄一個の壯士電の如く馳せ來り矢庭に二人の賊を斬り伏せ猶ほも其餘を追つ散らし危き難をば救ひ呉れたり是乃汝の實父にして某が再生の大恩ある勇士なりこの勇士は生れてより二三歳計りなる小兒を懐るにし容城へとて來る人なれば夫れより路伴となりて行く々々勇士の語るを聽けは此人は否汝の實父なる其勇士は素と本國の人ならず日本國より數年前に渡りし人にて初めは倭寇の群に在りしも本と清廉の君子にて不義に與する人にあらず殊更

コトヤラ

龍溪曰く唯是の日本刀唯是の日本人種則ち讀者をして卷を掩ふと能はざらしむ是れ構思管拔超倫ノ處

武技に長せしゆへ後ちは浙江省なる定海縣に居を定め本邦人に推され武技を教へて生路となし其國より携へし若干の資産を以て田園を購ひ求め遂に本邦の人となり衣服冠履悉く本邦人に異らす數年の後は言語も全く國語に化して何れより見るも本邦人に一點違はず其沈勇にして智慮深かゝりしは阿雲汝を見て想ひ出せり然るに不思儀の縁と云へるは倭寇討平の兵勇各所に散亂し士民の財貨を抄掠し子女を劫し容城縣も一群の兵勇に蹂躪せられて我家も抄掠せられ我姉にてれわせし楊翠娥も遂に賊の爲めに劫やかし去られしが如何とすべきようなく其儘にして打過きたり然るに此時汝の實父なる人は恰かも容城縣外に來かゝりて深夜樹林の中に

於て婦人の泣聲を聞き怪みながら窺ひ見るに兇漢の處女を捉らへて引き行くものにてありしかの直ちに其賊を打斃して我姉をは救ひ慰イヌり余が家に伴ひ來りしも家人悉く散亂し家中は全く空虚にて何れに在るを知るよし無けれの遂に携へて定海縣に立歸り縁ありて汝の父に想われ遂に汝の父に嫁し琴瑟調和暮らせしうち生み落せしは即ち其方阿雲、汝の母は即ち我姉にて我は汝の叔父なり斯る奇縁のあるとを初めて知りて互に驚き猶ほ姉婿の語るを聞けは汝を生みし十月目に汝の母は病死して乳母を以て養育しはや二歳になりし時は尋常の三四歳の小兒にも劣らぬ程に生長しければ汝の父も乳母を廢め自ら鞠育する折しも汝の父は止むを得ざる

木堂云奇傳

事故ありて歸國の念頗りに動き人を以て容城なる楊家の興廢を問せしに楊繼盛と云ふものありて其家を興せしと聽き大に喜ひ汝を懐ろにして一たび京師に入りし後更らに容城に來かゝりし途中にて乃ち我急難をは救ひ呉れしと茲に初めて分明りしかは互の慶喜は推して知るへし
と言ひかけて身を起し母屋ヲモヤに往きて函に藏めし物件を取り出し

此は是れ汝か父の遺物にて汝か生長の後汝に與へよとの命ありし二品なり一は即ち日本刀一は即ち巻物にて汝か家の系譜なるべし汝宜しく身に添へて永く汝の寶となすべし

と語り終るを待ちかねて

見も疾くより心附きしところあれ元來眞實の親子と假親假子の間には天然に發する愛情の差別あり大人の兒に於ける萬事に附けて看護者の如くに思し召さるゝの狀あるに常に心に懸りしとなりしが御物語にて疑ひ晴れたりさて見の實父に在せし人の其後如何なされしやと問ひかけられて繼盛は愀然として双眼に涙を浮め一小冊子を懷より取り出し

此冊子には汝が父の本貫姓名經歷素行に至るまで某か聞き得しまゝ記し附けたるものにてあり汝が父の容城なる余か家に逗留して五六ヶ月にも及ひしが本國に歸らんと便宜を求むる折柄不圖病に罹りて打ち臥せしが

ユルリナフ

藥餌の効もあらずして遂に果敢なく失せたまひぬ臨終の際に汝を抱きて余が前に推し前め今より大叔を見て父とせよとの一語を汝に添へて此世に遺せしときは余が心胸も碎くるはかりに覺へしやと始終の話を聞けるうち流石に剛毅なる士龍も双眼に涙を湛へ默然として暫時の語も無かりけり稍ありて件の冊子を推し戴き

寶刀と云ひ系譜と云ひ今此冊子の三種を併せて見の三寶と仕らん兒が立命の地を定めんとて志を決せし當日に此三寶の手に入りし時取りての嘉兆なり實父のといふ今更歎くも其詮なし大人覆育の大恩にて兒は幸に人となれり兒の何人の遺腹にあれ兒は既に楊家の兒な

り兒が眞の父といへるの大人御身の外にましまさず大人既に兒に許るさの明日より都を去りて兒の志を行ふべし
と思ひ入りて見ふけれの繼盛も其志の回し難きを推し量り遂に其意に任せけり

第三回 痴兒不了公家事 男子要爲天下奇

木堂云叙事周密足見彼國脚紳豪奢

樓臺高峻、庭院清幽、怪石を疊んで山岳をなし、水閣遙に竹場に通し風軒斜に松寮に連る池塘の碧流琉璃を漾し、小橋横さまに架して苔徑に接す紅艶綠陰を點綴し、喬木林叢に聳出す、木蘭舟は芙蓉池中に蕩漾し、鞦韆架は垂楊影裏に搖拽す、朱欄、畫檻、湘簾、綉幙、相掩映して光輝四面に注射す、個は是れ何人の第宅なるや主人姓は魯名は訥字は敏行邱山と號そ一縣に雙びなき郷紳なり生れ得て手姿瀟洒、氣宇軒昂、任俠放達進仕を好まそ洽ねく天下の英雄豪傑と交り廣く志士を養ふて大に爲す所あらんと期したるも野水舟絶へて彼岸に渡るの便りを得ず徒らに歲月を送るうちにも家富み榮へて王侯も及ばざる資産あれば斯く壯麗を極めたる

第宅を起し園池を設け後房には聲色を備へたる佳麗數十人を選び日夜知心の友を集めて歡樂を盡しけりされども此人徒らに自家の豪華に誇るにはあらず常に金穀を散して窮民を賑し又能く學士秀才を扶けて其志を遂げしめ一能一藝あるものは何人を問はそ扶助して其才能を盡さしむるを勉むるが故群盜の出沒するともあるも曾て魯家を聞かせしとなし斯の希世の豪傑が住める地は何處なるや即ち是れ大名府濬縣城外なる浮邱山下にして祖先より積み蓄へたる財貨の力にて幾と天工を壓するの華麗を造り出せり元來名花奇草の南方に産出し北地に到れば遂に涼死するを常とそるに魯敏行の財力は能く天然の氣候風土を制して自家の藩籬内に花木の別天地を設け何等の花卉を

孤峰云文情飛動

又云忽入題意

問はず四季折々の花草は悉く園中に收めて自在に己れの娛樂に供せり此人富は一縣を傾け才は一世を曠ふし交るところは悉く天下の名士なり若し能くその富を利用し其才を活使し交友の力を協せて世弊を救ふの策を講せは濟民の業を補助することありしならんに生來廉潔にして人の不善不義を惡むこと極めて甚しく郷黨中汚行の聞ある者の門前は避けて通行せざるほとなり然るに方今京師にては嚴嵩父子ことを専らにし奸佞時を得て朝政を亂り州縣の守令以下多くは其緣故に由りて職を得たるものなれぬ民を虐けて自ら肥やし賄賂苞苴の厚薄によりて公事を左右するの形勢なり魯敏行は斯る世の行途を見て常に憤懣に堪へそ己れの棲息せる乾坤は恰かも不平の大塊の

龍溪曰、乾坤は不平の大塊奇語奇想蓋し鳴鶴兄獨造の妙處

孤峯云此女兒脚頭頗有關係于後段不可無辨解

如く門戸を出つれ、無情の草木も猶其心に適はさるの感ありとて、曾て庭園の外に出て、日夜園中に在りて花に吟し月に嘯き、唯杯中の物を以て不平の心腸にそゝぎ、名士劍客の外は敢て交らず、時々高僧と禪理を談する、乃み正室王氏一男を擧げられたれども夭折せり、愛妾李姬一女を産み、今茲二八の春を迎へ、容顏麗く姿態秀曼、誠に絶世の美人なり、されども如何なる故にや、父敏行は襦袢の中より男子の装をなさしめ、世の風習にて女兒は脚頭の細小なるを貴ひ、美人の稱は脚下より來るが故に、女兒は生るゝの後直ちに脚頭をおま屈めて天然の形を奪ひ細小なる沓に曲け込みて、其發育を抑止るを例とするに、敏行は敢て此事を爲さず、固より男装のとなれば足も頭も皆自然の發達に放任せたり、名

は女兒に似合はしく瓊英と名けたれども自ら呼ぶ時は阿英と云ひ家人に命じて小姐等の稱をなさしめず、五六歳の時より良師を延いて書を讀ましめ、十歳の頃よりは射藝擊劍を習はしめ、全く男子の教育を施えて怠るとなりしかば、今日に在りては詩詞文章は言ふに及はず、弓馬の法、劍槍の術、悉く其妙を極め、天晴美丈夫と見ゑにけり、出生以來斯く育てあけしとなれば、最も家門に親しき者の外は、其女子たるを知る者なく、家人と雖も生誕の時に居合せざるものは、唯男子なりと思ふも、理り主人は深く其女兒たるを秘し、其事を知るものには口留めして洩らさざりしかば、世人は唯女にゑて見まほしき佳き男兒なりと稱ゑあへり、魯敏行は女兒の才學ありて、其言語動作の衣冠に立ち優りて、巾幗

に稀なるを見るに附け

阿英は天晴の丈夫なり何故汝は男兒に附着すべき一個の東西を遺失して生れ來りし予唯此物を欠くか爲め余が志業を繼ぐと能はずと折り々々に戯れけり

魯氏の家門は慶事のみ打續きて和氣堂に満ち恰かも人間生活の最大快樂を一家の中に專有せるか如く外間より觀るときは魯氏の家園は常に春風鶯花の時節のみにして一個の仙窟と思はるゝ斗りなれば人々其幸福を羨まざるは無し然るに此家の主人は此の一家の富榮に代へ難き不平を世事に抱き正當に之を洩すの道を得ず繼に杜康に訴へて醉裏の乾坤に胸懷を附托し徒らに永き歳月を送れり凡

そ人一身一家の事を全く離れて國家公共の利害を憂慮するの情は極めて高尚なるものなり俗人は其眞を知ると能はず貧寒の士家に擔石の貯なく幾んど生活に苦むの身を以て猶ほ能く國家公共の利害を憂慮し幾んど其身を危るゝものあり其心情は尙ほ富裕の人が其富裕より享受すべき快樂を不平に代へて世を憂ふるの心情と異なるとなし俗人より之を見れば寒士は衣食の計を得ずして常に窮苦を受くるが故に他の富貴を見て之を羨み遂に不平の心を抱き妄りに世事を憤ふりて説を爲すに過ぎすと擯斥し又偶ま富人にして公共の事に勞苦するものあれば彼れは富あるも威權なきが故不平を抱き他の權力を羨むの餘り不満を世事に訴ふるものなりと測了して其説を得たりとす

龍溪曰一段世態
之道者盡くす者

凡そ小人の心を用ゆるは皆自己の胸中なる暗き鏡にかけ
て、朦朧げに人の心事を寫すか故小人同士互ひに其心裏を
摸索する時は能く其眞を寫し得るも君子の心情ハ此等の曇
鏡に映るべくもあらざればいかで彼の高尚にして公明な
る心事を知るを得ん
澹縣の知縣劇仇は頃日新たに本縣に臨みし人にて未だ治
蹟の如何を知るの間合なしと雖も其進退出處に就て將來
に生すへき治蹟を想像すれば此人の爲めに氣節といへる
田園は荒蕪し徳義といへる草木ハ凋落すへき時節は早晩
到來すべしと思はれたり抑も劇仇が本縣の知事となるま
での經歷を聞くに最も親しく此人を知りし者も未だ此人
が書を讀み文を學びしとを知らず又世上知名の士に交際

木堂云冷語

木堂云不遇處反見
妙題

ありしとを知らず幼年の時より市井無頼の仲間にあ
りて騙詐の術には長たりといふとと嚴世蕃には何等かの便
宜を求めて深く取り入り一時は其幕賓と云ふべき地位に
立ち諸方の人より賄賂を貪り本縣赴任前には賤家の産れ
にて容色麗しき文を自家の妹分にして世蕃の小星に供へ
しと云ふとも疑ひなき實事なりといふ斯る人物なれば換
骨奪胎の妙法ありて體内の仕掛を取り換ゆるに非んば知
縣たるの後も其以前の劇仇と同一の成跡を現はそハ必然
ならんされば此人本縣に入りしより奸佞の徒は蒼蠅の臭
氣を透ふか如く争ふて其門下に集まり其羽翼となり爪牙
となりて貪婪を極めけり
却説劇知縣は門下の者共ハ魯敏行の動靜に就て彼れ是れ

と噂するを聞ひて思ふやう心悪き賤奴の振舞哉予が本縣に臨みし以來管下の富豪は皆相應に人情を齎らして予を拜するに彼奴一人毫の贈物をもなさず人を人とも思はぬ所爲好し々々其儘にては捨て置きかたしと窺かに心に憤ありけるが魯訥は固より浮邱山下の庭園外には足を着けず全く浮世と隔絶れて生活するか故塵事の榮果あらざれば知縣の取り廻く施政の範圍内に身を置くことなしこれが爲め知縣の事に托して魯氏を窘めんとするも其事の至て難きに苦めりまた折々出入する人々の語るを聞くに魯家の園池は天下に稀なる風景にて樓臺の宏壯は言ふもさるなり園中の奇花異草一層見事なり梅花の時節には千樹の白雪清香馥郁として人の肌骨に沁み桃花の候に向へば

孤峯云真個仙境食
嬰兒不得不垂涎

園林宛から紅錦を織り出し鶯啼燕語蝶亂蜂忙春色の輝て此園中に集まるゝと思はれ牡丹の候蓮花の節菊花の時四季折々の脈めによりて風趣を異にするも其景色はいつも十二分に真個の仙境なりと萬口一談盛んに稱賛するをもて劇知縣も坐ろに魯家の園池を見まほしき念を生し何とかして彼より迎へしめんと種々の手段を施し人をして暗に諷せしむる等手を換へ品を代へて魯氏の自ら迎ふるを促せども馬耳東風何の音信もあらざれば知縣は頻りに焦急僚屬に命じて其事を促すと益々切迫せるに僚屬は困じ果て魯敏行の性質は日頃より知れてあれば此方より明々地に申し込まは拒絶するは必然なりされば却て耻辱を受くるに至らんざりて知縣の斯くまでに執心なるを無

下に止むべきにあらず敏行が妻の弟なる王永は氣輕き人物なれば此者に内意を通して突然其家に赴き園中を一覽せば不意の^{モラナシ}にて先方に待遇の準備なくとも落度にはなるまじ又此方は一縣の知事なり敏行假令狂せりとも相公の臨ませらるゝ上は無禮を加ゑんとよもあるまじと自分勝手と理窟を附けて私かに王永に計りけるに此王永といへるは至つて簡率なる人物なれば別に仔細もあるまじと受け合ひしに予僚屬等は^{キカガ}大に喜ひ一同知事に申すよう彼の魯敏行といへるものは狂人にて相手となすべきものに非ず彼れか義弟王永といへるものは深く相公の徳を慕ひ相公若し魯家の園を遊覽とあらば願ふても無き幸なり唯我義兄は狂妄なれの知縣相公なりとて尊敬するを知らず

敏行が迎ふるとありとも却つて相公の震怒に觸るゝ等のとあらん唯豫め告げ示さず突然御臨覽あるに若うすと申出て候へは相公にも彼狂漢に御構ひ無く王永の辭に任せたまへと眞事偽言打ち雜せて^{マコト}唆かせしに予劇仇大に悦ひさらば其意に任せんと荷花盛開の日を待ちて魯家の園中に臨むとに決せり

嘉靖二十九年六月中浣魯訥は家にありて暑を園中の池亭に避け日々賓客を會して吟咏に日を送りける或時妻の弟なる王永來り劇知縣が園池を一覽せんとを懇望し不意に此處に來らんとを某まで言ひ來したりと語りけるに魯訥は其は以ての外の事なり彼れ屢人を以て余を諷し我より迎へしめんと試みたれとも彼れが如き鼠賊若し其足

思軒曰一段讀來使我肩飛神躍而吾亦不知其爲何故

跡を留めんには永く園池を汚すべしと今まで拒絶したりしに卿已に承諾せしは是非もなしと言ひ放ち豪歌狂飲に數刻を移し陶然として玉山將に頽れんとする時知縣相公の入來なりと罵る聲の聞へければ魯敏行はあらずもかなと思へる如き顔色にて手に把りし玉杯を池中に投し、脰を曲けて假寐せり王永は迷惑ながら門前に立ち出て知縣并に僚屬を案内せり此時劇知縣の轎を下りてさも横柄に王永に挨拶し蓮池の方へと進み來れり元來此池は碧澗池と呼ひ池の中心に一坐の亭子あり、觀濶亭と名く、亭の四方は碧を湛へし水面にて遙かに山岳に連る、亭に通するには橋梁を設けず、採蓮舟を以て渡をなす、亭子の周圍は翠幔紗窓總て夏景に適へり、清風徐るに香を吹き、水中の金魚藻に戯

れ、梁間の紫燕巢を尋ぬ、鷓鴣爭飛、鴛鴦對浴、眞に絶景と稱すべし、亭内には藤床、湘簟、石榻、瓶中には美酒を盛り、盤裏には金桃、雪藕、沈李、浮瓜の諸果を列ねたり、賓客は知縣の來りしを聞き主人の假寐したるを見て皆採蓮舟に乗り山岳の方に向ひ岸に上りて或は樹陰の間を散歩し或は岸邊に傍ふて游魚を數ふるあり、此時劇知縣は王永に誘はれて池畔に來り、滿池の紅白嬋娟を競ふて碧澗に映さるを一望し更らに採蓮舟に移りて池亭の邊に泛へたるも池亭に立ち入らざるは王永の心を利かせて斯くは謀ふものなるべし暫くして知縣を乗せたる舟は岸頭に着し稍小高き處にて一面は水に臨み一面は楊柳の高く生ひ茂れる間に設けたる亭子に憩ひ王永の吩咐にて下廝等が美酒佳穀を持ち運ひて

接待を盡したり知縣は先程より主人の出て來らざるを快
 らず思ひしも王永が接待振りの懇ろなるに慰められて杯
 を把りあげ暫し打ち興してありけるが此亭子は高丘にあ
 れは池心の亭子をば見下して微細に其中を瞰ふを得るを
 以て知縣は魯敏行の醉臥せるを見て更らに憤懣を加へた
 り少時ありて魯敏行は睡の覺めたる模様にて欠し伸し下
 所を呼んで嗽き了り四方を見廻しながら

龍溪曰く脣直苟も
 合はず鳴鶴兄に非
 れは寫して此に至
 る能はず

俗臭鼻を衝いて堪へ難し去りて深林に入らん
 と言ひかけて下所を隨へ採蓮舟に乗して楊柳亭の前面を
 過ぐる時

猛虎雖猛猶可喜橫行只在深山裏
 と放吟したるを知縣は等閑に聽き流かせしが僚屬の中に

て張京といへるもの聽き咎めて私かに知縣の袂を引き彼
 れ狂漢相公に不敬を加へ相公を誹りて酷吏となし彼の酷
 吏猛於虎といへる語に寓せて高季迥が猛虎行の結句をば
 吟せしなりと私語きしかは劇仇怒火心頭に燃へ出てしが
 障らぬ体よもてなしイザ罷らんと左右を急がせ此度は岸
 上より捷徑に沿ふて歩みしかば忽ちにして園林を背にし
 轎子を置きたる邊に出たり魯敏行は知縣の轎子に乗るを
 見て直ちに下所に命し

速かに俗吏の汚したる足跡を洗ひ清めよ嗚呼余が清白
 の乾坤も遂に賤奴の塵垢を着けたり
 と叫ひしを知縣は轎上にて聽き取り其まゝ縣衙に歸りし
 が怒氣天に沖り轎を下りて門に入り堂に上り室に入るの

木堂云憤激之態寫
出逼真如見其人

間も口角に沫を噛み出し腕を扼してありけるが
蒼生、狂漢、匹夫、々々、今に思ひ知らさん
と叫び出て迎ゑたる婢僕を散々に罵り夫人までも叱り飛
はし連りに六七杯の酒を傾けて何か口中にて喃々と呟き
つゝ眠に就きたりさらぬだに魯訥の動靜を憤り一度は窘
めて呉れんと思ひ居たるに今此侮辱を受けて愈憤懣に堪
へ難く遂に公私に係る總へての事務を抛ち身心の全力を
傾けて魯氏に仇する事のみを用ゆるに至れり
却説劇知縣の家に頃日食客となりし袁吉といへる破落戸
あり久しく京師に在りて知縣とは親しき交ありしが或時
劇仇が市中にて人と争ひ對手を傷けて逃れし時此袁吉が
深く秘匿せたるにより幸ひに罪を免かれたる故袁吉は其

思を笠に被て屢次知縣を音信れ金錢を強求り頃日は遂に
其不速客となりて知縣の恩人なりと觸れ廻り博徒の群に
入りて心のまゝに振擧ひ賭博の本錢竭くるときは直ちに
知縣に強談するにぞ今は知縣も其請求に堪へず幾んど持
て餘ましたれども荒ら立てゝ拒むときは舊惡を表露さん
とを恐れ手を下さすの機會を得ず煩悶してありけるうち此
回の事件の起りしに予此時に乗して一擧して二害を除く
の策を施さんと肝膽を碎きけるが張京は固より奸智に長
けたる者なれば窈かに與に相謀りて魯敏行を陥れんと企
てけり

第四回 人情似紙張々々薄
世事如碁着々新

劇知縣が魯家の庭園に押掛け往きし翌日に敏行は獨り書齋に閉ち籠り何か苦慮せる如き面色にてありけるが少時ありて書齋を立ち出て庭園を散歩して池邊に臨みたる小亭に入り四方を眺めてありしに家嬢瓊英の婢子を従へ入り來り

茲に用事は無い程に彼方に往て仕かけし事をなし遂げよ

と吩咐て婢子を追ひ遣り纏て父の前に進み昨夜大叔に様子を伺ひ參らせしに父君には知縣を痛く罵りたまひしものとなるが其は禍の端緒ならんと斯く小女子の賢ら立ちて申し上るは憚り多き事にはべれと

凡そ正しき人の心は常に潔白なるか故姦邪の輩に恐るべき險毒の詐術あるを^ヲ窺り知らず遂に姦徒に^{ヤカク}窘めらるゝは古今其例少からず父上昨日知縣を辱めたれば彼人黙して止むべきにあらす必ず事を惹き出して父上に及ぼし意恨を晴らさんと勉むるなるべし父上此處に^{オカシ}在しなば其禍を免れ難し速に跡を收め山水遊覽と披露したまひ心敏きたる従者を携へ遠く去りて名勝を尋ねたまわば一つは身躰の壯康を加へ又二つには禍を避くるの便宜となるべし

と丈夫も及ばぬ深謀遠慮に魯敏行も打ち點頭き少し考へ居たりしが^{アタリ}四邊を見廻し聲を^ヒ潜め余が昨日の^{オトナ}舉動は大人^{オトナ}志からぬとよてありしさりな

ら余は往きに彼の知縣を本縣より追ひ出さんとの計策を設けたり先日京師の知人より近きに按察使の出かける旨を報し其折政蹟を勘査して必ず免黜を行はんと確かに音信ありしのみか前きに舊友三宗茂より寄せたる書にも今度の按君は正義の士なれば必らず能く姦を鋤くべし氣遣ひあるなどの文意なり左すれば知縣の命脈を永く保たん様はなし余は此事を知るが故醉に乗して覺へず^{オカシ}彼奴を罵りしか今更思へば^{オカシ}淺慮なりし左れども彼奴が事を^{オカシ}工んで害を加ふる其以前に自ら其地位を失ふべし凡そ物先づ^{オカシ}腐りて蟲之れに生すといへり人も亦然り己れ自ら敗りて譏問之れに乗するものなり我は人と交を絶ち此園池に閑居して全く世塵と隔つる故俗人

より煩累を及ぼすべき縁故少あし彼奴何程姦智ありとも容易に事を起し難し卿の諫もさるとながら其は餘りに奥法と云ふべし漫遊は余も甚た好物なれども今は即ち其時ならば彼若し人を怨むると卿の言ふが如くんば必ず我身にのみ崇るべからず一家を擧げて悉く其敵となし我にして家に在らすんは彼れは愈其事を行ひ易し好し我畢生の志業遂に成らすして小人の毒計に死するとあるも是れも亦命なり如何すべき汝にして男子ならんに

と言ひかけて打笑ひ

是れも亦愚痴なりき豪士無所用彈弦醉金疊
と李白の詩句を朗吟して

思軒曰余頃久息飛
壽之姦安得如此之
人而痛飲一場了

孤峯云一語聲妙

卿の暫く青州從事と交代せよ

と言ひければ瓊英は猶ほ其心に思ふ所あるか如く何事をか言はんと欲する意氣込は嬌しく清き容貌に自然と現れたりしかと又思ひ直せる面色にて心ならずも起ち上る折から來かゝる下廝等に何事をか言ひ含め徐かに歩を園林の裏に移し緑樹芳草の間を逍遙せり溪水潺々と流るゝ音は瓊環を鳴らすか如く蟬聲の風に亂れて時々其音を遏むる趣いと幽静を添へにけり瓊英は深く思ひに沈みたる故にや鳥聲水音も耳に入らず目の官能も僅かに足の運びを指揮するに止まり雅趣を装ひ嬌艶を呈して観る人よ媚んとする天然の景色も遂に此の逍遙者を誑誘するに能はざりし然るに人の感情は時ありて極めて細微なる物に觸

又云文情亦麗婉不
減魯家小姐

孤峯云此一段有大關係于全篇脚色魯家龍滅敵行寃死後年瓊英報仇結構萬在此中不可等閑看過

れても至つて大なる發動を惹き起すものにて瓊英は不圖脚蜘蛛が疎らなる樹杪の上に跨り織糸を吐き出して彼方の樹杪に繋ぎ縦横に奔馳して密網を組立つる状を見て感に觸るゝ所あるにや頻りに諦りつめて居たり此蜘蛛は新たに其住居を營むにはあらで其舊宅は依然として深樹の蔭にあり蓋し此野心深き蠢物は其同類なる蟬蜂蝶若くは蜻蛉等を陥れて獲物となさん底意にて斯く樹杪の間に彼等の経過すべき要處を見立てゝ網を張り居るものぞ知るべし方さに深慮に沈みたる此逍遙者は蜘蛛の經營を監視すると凡る半响斗り其視官は全く此微細なる織糸の中に占め取られたり蜘蛛は其仕事を終りて徐かに舊宅に歸り只管敵を俟つものゝ如し暫くありて遊蜂の花香を逐ふて舞

孤峯云用意懸懸如蜘蛛結網布置精巧伏線周密讀者常在包羅中而自不知

ひ來るあり其羽尖僅かに縋にゐるや否蜘蛛は矢の如く駈け來り一縷の白煙進ると見る間に蜂は已に其全羽を縛され漸くにして全体悉くろの包羅中に在り瓊英は獨語蜂の能く密を醸し其作用の頭敏にして且つ護身の劍を帯ひたるすら豫め意を用ひて巧みに敷置したる陷阱をば免れ難く直ちに細蟲の爲めに縛られて死に瀕せり姦邪の徒間なく時なく意を用ひて人を陥るゝの手段も此の如きものならん恐るべし斯く言ひつゝ何か心に憤ふる所あるが如く手でろの樹枝を折り取りて彼の密網を打ち破り擒に就きたる蜂を救ひ出して其縛を解けは蜂は辛ふして其羽を動かせしも忽ちにして斃れたり小女は此体を見て怒れる面色なりしが眼

を轉して蜘蛛が其舊宅に歸り圓形に張り設けたる網の中
央に蟠居するを見て恰かも蟻を復するが如き意氣込にて
直ちに之を襲ひ其巢を衝て蜘蛛を叩き落し足下に踏み潰
せり小女は嬌笑の中に

心地よし々々々我れ汝の仇を報せり我れ能く毒蟲を
退治して汝の冥魂を慰めたり

と言ひ終り死したる蜂を取りて溪流に投せしを爲めに水
葬になしたる心地なるべし斯くて小女の園を出て、母屋
の方へと進み去れり

却説劇知縣の日夜思を焦して魯敏行を陥るゝの手段を求
めたるに彼の張京と計議全く整ひしと見へ張京は其後王
永と一層親しく交を結ひ公務の餘暇に常に其家に入出

して輿に琴棋を弄ひ又王永の嗜好に適へる物件を贈りな
どし固より諸事に抜目なき慧捷の質なれり只管王永の心
を迎へ遂に二なき親友と思ひしむるに至れり一日張京の
王永に向ひ某一個の良劑を貯へたり斯の解醉に効能あり
て如何程に爛醉するとも之を服するときは立るに醒むる
の効ありて實に希有の良藥なり凡て人の家には種々なる
との有るものにて偶まに酒を使ふて人を惱ますもの無
きにもあらず四五帖御邊に進らす程に要ある時に用ひた
まへとて件の藥を贈りしかば王永の辱しと受け納め某は
御承知の通り悪客なれば家に入出るものも皆同臭味の人
物なり併し某が義兄の家には酒に狂して人を困らざる入
の出入すると多けれり用ひて効能を試みんと懐に收めけ

り夫れより兩三日を経て王永の魯家に赴き敏行に面して
 四方八方の話に時を移しけるが折柄知縣の許より來りし
 使者なりとて王永に謁を求めければ魯敏行は知縣の使者
 と聞き快からぬ面色して直ちに其坐を起ちしかば王永立
 ち迎へて右の使者に面會するも彼の使者は袁吉と呼べる
 ものにて自ら知縣の縁類なる趣を陳へ先般貴下の周旋に
 て相公には得難き遊覽をなしたり其悦を謝せよと拙者に
 命し微儀を獻せしめんとする次第なれいと言ふ語さへし
 せろにて舌も廻らぬ金切り聲酒氣紛々として鼻を衝き下
 戸の王永の堪へ難く殆んど困じ果てしが義兄が此物を受
 けんと思ひもよらす目に見るさへ穢のしと怒るならん程
 よく謝して返すに若かずと心に思ひ定めしかは件の使者

趙溪曰く此邊少く
 水計の具氣あるを
 惜む

に向ひ其は又懇切なる御沙汰なり辱くは候へとも此方に
 て禮物を受くるへき謂れなければ何卒御邊より取なしあ
 りて御返し下さるよういたしたく又某よりは張京どのに
 其譯をれ話し申して知縣相公の許可を得んと言へとも袁
 吉の聞き入れず強いて御辭退とあらば致方なければとも此
 儘持つて歸らんとは拙者決して肯わすと時り狂ふも酒の
 爲と王永は心附き頃日張京より贈りし妙薬今ころ用立つ
 時至れりまづ解醉の薬を用ひて醉を醒せし其上にて懇ろ
 に頼みなば又詮術もあるべしと思ひ定めて使者に向ひ然
 らば仰せに従ふべし兎に角態々の御入來なれば粗酒を獻
 上仕らんと家人に命して酒殺を取り寄せ羹の中に彼解醉
 の薬を加へて消めしに予袁吉の酒と聽て鼻蠢めかし一連

に六七杯を傾けて舌打ち鳴らし流石に豪家の聞ゑある魯家の酒は又格別^イサ佳殺を拜味せんと羹を一口に喰ひ盡して更らに又杯を手に取り溢るゝ斗り湛へつゝ吞まんとする時目を見張り俄かに面色深紅^ニ變し鼻口より夥しく出血し支体の惱亂に堪へ難き有様にて物さへ得言はず^ハ合派と臥して死んでけり意外の珍事に王永も仰天なし唯茫然として語もなくさては張京が解醉の妙薬と云ひしは偽り誠は毒薬にてありけるか此は如何にせんと氣も顛倒周章狼狽する析柄門外にて知縣相公より先刻送りし使者袁吉唯今まで歸館無きゆへ相公の命により轎子を以て迎ひに來れり袁相公に早々歸館あれかしと傳へたまへと叫ひ立つるに王永ハ益驚き茫然としてありけるに家内の者も

馳せ集まり共に驚きて膽を消したる斗りなり折から一室を立ち出てしは家宰雍秦といへる老人にて性質沈着にして篤實なる者なるが王永に委細のとを問ひ亂し張京より贈りしといへる藥劑の残れるを受け取りて其懐にシカと收め夫より袁吉の死狀を驗め斯くなる上は別に詮術なし事實^ニを迎ひの人に告げて引渡すの外なし甲乙は此事を早く老爺に告げ候へと命しつゝ自ら起ちて門外なる知縣の下人に打ち向ひ

御使者袁吉殿には痛く酒を過てされ當家に於て甚た迷惑に存せしゆゑ兼て知縣相公の御下僚張京殿より王永に賜はりし解醉の薬を用ひしめしに如何にしけん忽ち鼻口より出血して死去たり右の譯に候へば定めて張相

公には御覺あるとなるへし其は後々に判然すべき義に候へば兎に角死骸を改めて御受取あれかし
 と言ひけるに下人の群より頭人と覺しきが進み出て、言ひけるは其は謂れなきとなり張京は知縣に亞くべき重き役柄の人なれば左様のとあるべき譯なし何れにせよ死骸を驗め右の藥を一見すべしと落着き拂つて打ち通り篤と死骸を改めていかにも全身紫色に變して出血なしたる有様は毒に中れるに相違なしと言ひつゝ王永より件の藥を包みしといへる紙片を請ひ取り打ち返し々々々々驗めしが忽ち怒りの聲を揚げ初めより胡亂なりと思ひしに果して違はずコレ此の紙を見よ蠅頭文字にて魯家秘藥と書せしならずや此れさへあれば證據は分明委細の事は相公の

御沙汰にあらん我々は生きてゐる哀公を迎ひに参れり死かたる哀公を受け取るべき命なれば一先づ歸りて復たこゝろ参らんと言ひ放ちて走り出つるを王永が遮て、留るを振り放ち空轡を昇キ荷はせ飛ぶが如くに馳せ去りけり初より事の様子を聞きたりし瓊英は燒眉の急に驚き憂ひ父の前に跪き

知縣の毒手早くも家門の内に入れり根強く仕組みし手段なれば免かるゝと適ふまじ速かに遁れ出て、禍を避けたまへ

と諫むる小女の顔を眺め

我已に人に先ずると能はずして彼より制せらるゝの地に立てり我命運も是迄なり丈夫世に在りて志を行ふと

能はずんば已に世になきに同じ斯る有様にて生存するも無益なり寧ろ死せるころ優ならめ今假令汝の語に従つて遁れ出つとも斯くまで緻密に工みたるものが争で其獲物の網を脱して走り去るべき路に注目せざるべき怒エモハひに遁れんとして敵に捕はるゝときは却て無實も實となり無上の耻辱を受くべきのみ正道に由りて何處までも辯争せば冤を明かすの時あるべし天道誠を照らすして奸徒の筮楚に斃るゝとも天定まるの日無きにあらず汝は雄々しき資性にて心操さる男子に優れり我れ捕はるゝの後に至らば賊輩必ず家を滅やし我財を奪ふの計を施すべし汝は深く身を潜めて時の至るを待つてろよけれ此箱中には家に係り國に關る重要な事を記せ

る文書を秘め置きせり緩急あらんとき發き見よとて瓊英に渡ししけれバ瓊英の受け收めつゝ見仰る眼に涙を湛タぬ齒を切りて辭なきは若し何事をか言ひ出さば女子の言甲斐なく與怯未練の振舞なりと叱られんともやと氣遣ふてのとなるべし折柄門外騒かしく二三十人の捕卒バラ々々と室内に闖入し矢庭に魯敏行を縛めて知縣相公の一族袁吉を毒殺せる罪跡已に分明なり衙内に引き連れ吟味を遂くべし又袁吉の亡骸も共に受け取り歸るべしと匆々に言ひ渡し人数の半は囚人を警護し他の一半は亡骸に引き副ひ縣衙を指して立ち去りけり
夫人王氏の此程より病に臥してありけるが此有様に打ち驚き病勢益々劇くなり行き今のはや玉の緒の絶へなん斗

りの危篤に逼れり平生雄々しき瓊英もさすか婦女子の本
然心も弱はり氣も沮み哭して慟く有様は目も當てられぬ
斗りなり

第五回 黄鶴翅垂同燕雀 青松心在任風霜

魯敏行は縣中の獄に拘繫れ日々法衙より引き出されて糾問
を受くるも固より毫も身に覺えなき事なれば明白に言ひ
説けども知縣は魯家秘薬の四字を以て證據となし且つ其
家にて毒殺されたるも實事なれば魯訥が其義弟の王永
に命して殺さしめたるに相違なしと言ひ渡し王永をも拘
置したり王永は素と彼の薬を解酔の薬なりとて張京の贈
りしを眞實と思ひ袁吉が酒に狂ひたるに困じ果て羹に交
へて飲ませしとを陳白し決して魯敏行より關係なき旨を辯
疏するに知縣は大に怒りて己れの罪を逃れんため踪跡も
なき事を構造して他の廉吏を連累にせんとするは不埒な
りと罵りて其語を取りあげて果ては獄卒に命して痛く答

龍溪曰之地方官を
して法權を兼掌せ
しむる支那古制度
の弊、盡出して明
白、

を加へしかば生來艱苦に出逢ひしとなき敏行は答の痛楚に堪へかねて幾んど死に瀕したり王永も亦劇しき答に撃ち搥がれ死して復た蘇ると再度に及べり今日もまた知縣は敏行王永等を引き出して拷問に及ひけるが王永は知縣の傍に在る張京を見るより怒れる眼に朱を注ぎ逆賊張京汝能くも我を欺きしよな汝が手つから我に贈れる毒藥にて汝が家の害を掃はせ又我家に仇せんどの深き企謀と知らずして汝を近けしは我誤り如何程に辯疏するとも證據なしと言ひ張りて取りあげぬこそ奇怪なれ假令證據の無きにせよ汝の心に問ふて見よ汝が口は汝の心をも欺きしを悟らざやと澁溜たる聲を張り揚げ睨みつめてありけるを張京ハジ

孤峯云宛然佞骨口
吻

又云屈辱痛快

ロリと見遣り劇知縣に打ち向ひ相公、見うなわせ彼奴は發狂せしに相違なし言ふとも渾べて取り留らず逆も吾曹には理解し難し罪跡も分明なれば刑名を定むるこそ至當なれと陳しけるに王永は益怒り更らに發言なさんとするを魯敏行は制して言ふよう王永、汝、何をか言ふ相手、を人類と思へばこそ人間の心と人間の口を用ひて互ひに對談も致すなれ相手に人間の心なくば禽獸に對つて論判するも同様なり無用の辯論は止まり候へと傲然として嘲罵す其語も未だ了らざるに知縣は怒氣天を衝くばかり面色宛乎烈火の如く物をも言はず自ら席を

飛び下り下人を指揮しソレ打ち据へよとの語の下に棍棒
左右より亂下して敏行は満身朱に染みたるまゝ氣息も已
に奄々たり知縣は更らに士卒に下知して今日の拷問は是
迄なり兩人共に獄舎に引けと語短かに言ひ舍てく直ちに
退衙したりけり

魯敏行は平生交遊を好み廣く天下の諸名士に交り志氣あ
りて資力無きものは財を吝ますして之を助け一身の名利
を謀らざして常に國家の爲めに力を致したれば世間に向
つては大なる勢力を有すべきものと見へたりされは此の
如き奇阨に罹りて酷吏の爲めに生命を絶たれんとするの
日に遭はし此れまで交りし賓客此れまで扶助せし志士勇
士は四方より雲集して此人を救ひ出すとならんと思はる

孤毫云嘗盡世味者
必能知此情

に左は無くして一人の此人の爲めに力を出す者なきは
亦奇ならずや嗚呼熱附寒離は人情の常歡樂は共にすべき
も憂患は共にすべからざる平常無事の日に於ては親友とな
り益友となりていと頼もしかり夫人も一朝變ありて禍害
の身に及はんを恐るときに遭へば退いて自ら護るの方便
のみを求むるは尋常の人に在りては即ち是れ尋常のことに
して深く責るに足らず敏行が斯る身となりて從來其恩澤
に潤ひし賓客知己の一臂の力を出すもの無きも浮世の常
例に相當せると云ふべし惟ふに敏行とても其友を擇ふ
とには深く注意したるならん否寧ろ擇ふに過ぎたりと云
ふべき程にて其平生交遊したる者は皆一時知名の人のみ
なるべく又平生其恩義を思ふ人もあるべし或は今日の冤

孤峯云二十四郡無一人善士乎人情輕薄可想

又云屠者説入輕薄益甚的人情薄筆自在

枉を視て之れを憫み力を出たして救はんと志す人もあるべしされども敏行の禍害は賄賂にて救ひ得べきに非ざれば其外の手段にては容易く援くべきに非ぞ唯生命を賭し腥風血雨の下に救ひ出すの一法あるのみ是れ文弱書生空詩浮文に長するの故を以て一時名聲を博したる輕薄才子輩の爲し得べき所爲にあらざり且や敵の勢力甚だ強く威焰當るべからざるを見ては少しく勇氣あるものも大抵逡巡して心には不満を挾むも遂に黙して止むは世に有り勝ちのとなり敏行が交遊せる人も多くは此圈套中の人にてありしならんされども世には朋友の危急を見て救はざるとはさて措き觀交ありし友を賣りて自ら策利を貪り甚しきは平生思義

孤峯云敏行實擇友唯如何天下少益友

又云一句抄結

を受けたる人にて一朝顛倒するに會へば隨て之れを排擠し其衣を剥ぎ其肉を食はんとする虎狼の輩少からざり何なる達人君子と雖も其親友中より身を傷け譽を損するが如き者を見出すは往々にしてあり斯る澆季の世の中に在りながら己れに背いて策利を謀るか如き者を平生の交友中より一人も出さざりしは敏行が猶ほ能く平素其友を擇ひたるを證するに足るべし敏行は劇仇を敵となし初より之れを斥けんとなしたり然るに敵に先んせられて遂に敵を取れり草莽處士之精神は公明なる清世には勢力あるものなれども腐敗を極めたる濁世には至つて力なしと知るべし魯敏行が富王侯に比ひ勢一縣を領けし如く見へしも唯是れ轉瞬の夢にてもありき

家宰雍秦は主人の身の上を思ひ煩ひ何とかして救ひ出さ
 んど種々に工夫を廻らせども別に良策もあらざ豫ねて其
 家に客となりし馬忠字は知節といへる人は爲人粗野なれ
 ども力飽くまで強く豪膽にして義勇ある者なれば事あら
 ん時要をなす人物なりと主人も日頃仰せありしが折り悪
 しく山東に遊歴して今は何れに在るを知らざ其外頼母し
 き人々は皆此地に在らざれば共に謀るべき者とはなく
 獨り歎息してありけるに忽ち捕卒闖入して知縣の命なり
 と陳告し直ちに縛して引き去りたり
 湯雲微駭れて涼月を吐き園樹影を倒にして池水に落つ夜
 も早や二更を過くる頃萬籟寂として草木も眠り流るゝ水
 も聲を退むる計りにていと物凄き庭の面牆根に傍ひし林

孤峯云倏然描出美
 丈夫佳景致詞者目
 益忙

鏡を押し分けて半身を現はしながら前後左右を顧みて稍
 く全身を顯はすものあり高く庭隅に聳へたる槐の幹に身
 を寄せて頻りに四方を覗まへたり此時彼方の書房より絃
 音高く射出す箭先きに件の曲者は袂を縫れて槐樹の幹よ
 射込まれたり驚き遠てゝ逃げんどもかく曲者の目前にッ
 カ〜と立ち寄りしは一個の美はしき少年なるが携へ持
 ちし弓を投げ棄て一條の繩を取り出し手早く曲者を捕縛
 して以前の書房に退きけり曲者は唯茫然として語無く引
 かるゝ儘に書房に入れば小年は火影に曲者の顔を押し寄
 せ熟々と視て不審の体
 汝の面色は見覺ぬあるやうに思へり
 と言ふ顔を見あげて曲者は涙を流し

郎君にておわせしか淑くは父君に大恩を受けたりし
甘傑にて候ふ

と言ふに少年はいよく訝り

深夜に乗じて墻を踰へ人家を窺ふ汝の振舞察する所余

が家の案内を知りたる爲め人に頼まれて我家に仇せん

との心なんら包まざ白狀せば命丈けは助け得させん

甘 今宵忍ひ來りし顛末は悉く此書面に記してありイザ御

披見を賜はれ

と眼で知らせたる懐を少年は搔ひさぐりて一封の書を取

り出し始終を篤と見終りて且驚き且感しツト立ち寄りて

繩を解き何か言はんとしたるが忽ち働と打ち伏して聲

を忍ひて哭きけり抑も此の甘傑は何者なるか復た何故に

此に來りて少年の哀哭を惹き起せしや原來此の甘傑は浙
西寧波の者なるが漂泊して濬縣に來り暫し魯家に食客と
なり居たりしに或時人と争ふて相手を殺したるより遂に
官に捕れて嚴罰に處せらるべきを魯敏行が金錢を抛ちて
救護したるにより命を全ふしたるものなり此者頗る才智
あり殊に身體輕捷にて善く墻を踰へ樹を攀ち鞠を使ふ技
に長したれば敏行は側近く召し使ひしに四五年前郷里に
歸るとて暇を乞ひ立ち去りし後は消息も無かりしに今宵
竊かに魯家に來りしは固より故あるとにて往きに甘傑は
再び故郷を出て、濬縣に來りしに折節敏行は冤罪にて縣
獄に繋かれしと聞くより直ちに舊知なる某を便り會て敏
行に宿怨あれば獄卒となり官の鞭撻を藉りて怨を晴らさ

んと望みけるに其人直ちに張京に告げたるに張京深く喜
 ひ知縣に其由を陳べ獄卒に採用したるが甘傑は又此時を
 以て受けたる大恩を報せんと他人の面前にては殘忍なる
 体にもてなし酷く敏行に當るさまを装ひけれども兼て其
 身の獄中に立ち入りし本旨を竊かに敏行に告げて人無き
 折には介抱に心を盡し甘脆き食料を私かに贈りなとする
 に敏行は憂きが中にも少しく慰め居たりされども身体の
 疼痛に取り交せて日頃の豪飲にて腸胃を傷ひ居たれば獄
 中にて病起り漸く危篤に逼りしに予甘傑も其療養の覺束
 なきを知り密か薬餌を與へなとし又張京に對しては敏
 行の病は重体に見ゆれども追付本復せんと疑なし彼が白
 狀せざるうち小日を重ねば彼が平生養ひたる壯士輩は縣

孤峯云推己及人聖
 人之言有此終焉之
 一語而後面揚雲魯
 英奇遇一層加精彩

衙を問して奪ひ去ると無きにしも非ぞ寧ろ今のうちに毒
 薬を用ひて殺害し重病にて死したりと披露せんには事穩
 便に濟むならんと勧めけるに張京も又近々按察使の來る
 べき噂もあれば遷延かば面倒なりと知縣に其由縁を告げ
 れば實にもと同意し遂に其意に任せけり甘傑は其命を承
 け毒薬なりと唱へて密かに良薬を與へ病少しく怠りなば
 隙を伺ひ偷み去らんとこの意を敏行に告げ、れども敏行は
 頭を左右に打ち振りて否々我運命は已に盡きたり家を出
 つる時阿英に書を遺して後事は悉く示し置きたり今ハは
 や思ひ置くと毫もなし唯此の如き艱苦を身に受るにつけ
 ても濟民の志業成らざるは返すくも遺憾なりと怒りの
 眼を睜りしが嗚呼是れも亦詮なきとなり今宵は余が終焉

思軒曰排去殺行處
只此如是亦皆異常

の期と思はるれば汝は夜に入り密かに我家に忍び入り阿
英に此趣を告げ知らし一刻も早く家を立ち去れと傳へ吳
れよと言ひ終り家を出つるの初め兼て用意やしたかけん
衣服の縫目より薬を取り出し服しはるゝ忽ちアツト仰反
りて脆くも息は絶えにけり甘傑は周章狼狽悲歎の涙に暮
れけるが所詮治し難き重病なれば思ひ絶えたまひしも無
理ならざされども自ら服せし毒薬は敵を計るに倔强なる
便宜なりと思ひければ張京の許に到り其手にて毒殺した
るとに言ひ持らへて欺きたるに張京は深く其功を稱し追
て重く登用すべしと言ひけるに予甘傑も拜謝し寓舎に
歸れる体にもてなし密に此に來りしなり瓊英は涙を揮ひ
我思ふ旨あれば汝は早く立ち返り猶ほ劇仇張京に隨身

して彼等に加擔なせしと思はせ秘事隠謀を探るべし早
くく
と言ひ捨てゝ起たんとするに其は情なし今より郎君に隨
從して如何なる艱難辛苦をもと言ひ出すを打ち消し
益なきとに勞せんより我意に任せて早く行け
と争ふ折りから廊下の方より寢音の聞ゆるに予瓊英は遽
たこしく

人の此に入り來るに早く去らざば汝の信義も書餅とな
らん早くく
と促かすに予甘傑も折り悪しと立ち去りし跡に侍女は遽
たこしく

夫人ははや御臨終の御模様

龍溪曰く僅々數句の情景則ち能く眞に通る

と言ふを聞くより瓊英は哀悼悲痛の盤石もて頭の上より
壓さるゝ如く心氣幾んど惱亂するを靜かに抑へて思ふよ
う父の最後を今聞く耳にて母の臨終を聞かんとは如何な
る不祥の此耳よ如何なる不幸の此身乎と唯默然としてあ
りけるがやがて侍女コシモト誘はれ母の房へと出て行きけり
四更に近き空の色コシモト曉天報る雞の聲流るい雲と背馳して跳
る玉兔の影苦へつ風も身に沁む野邊の路駿馬に跨り弓矢
を負ひ俊爽ツルシク扮装つ少年あり急くとすれと何となく跡に心
の残りけん見返りく行き過くる後より駈け來る一人の
蒼頭ソウダウ旅行季を携へてツルシク追ひ附きつ
郎君今は心安し徐かに支度を整へたまへ
と言ひつゝ行李を鞍の後方に結ひ附けて轡を取り控ゆれ

ば少年は涙を揮ひ

父の遺命モトメ黙止難く家の難義を外にして逃るゝ此身の悲
しさを悔しモタシ母の病死は悔んで詮なし父の非命は恨むべ
し時節を待つて仇を報せんさるにても甘僕汝が忠誠は
感するに餘りあり汝の援助なかりせばいかで今宵の中
に家を出て父の遺命を全ふするの便宜ヨスガを得べき駿馬を
厩より引き出し窈かに裏門を開きしを知る者の無かり
しも時に取りての僥倖シキマシなり叔父君と雍秦をば蔭ながら
扶け呉れよ我家は遂に奸賊の手に落ち田宅財貨は皆彼
輩に掠奪せられん敢て惜むに足らされとも清淨なる我
所有の盜賊等に積さるゝは厭ふべきの限りなり
と言ひつゝ其心に思ひけるは我れ巾箱フナバタの身を以て幼穉の

頃より男装なし文學武藝を始めとなし凡て男子を學びしは今日あるの準備にとてはなさいりしに父の奇癖に今日まで斯る奇行をなしたりしは此大厄の起るべき前兆にてありしならんぞ雄々しく見へても小女の心情いと悲哀に沈みけり

抑も瓊英か其母の死したる夜俄かに家を遁れ出てしは往きに父の囚に就きし時豫しめ瓊英に諭し一函の書を留め緩急あらん時披き見よと教へしを心に銘してありけるうち甘傑か忍ひ來りて父の非命に死したるを報し次て母の終焉に際し一家の乾坤は顛覆するの騒動あり是に於て遺書を披き父が兼てより死を決したる事又父死するの後は禍必そ其身に及ぶべければ父死せりと聞かば遠く逃れて

害を避け父が生前の知己と謀りて復讐を謀るべし又其家に貯へたる財貨は必ぞ敵の餌食となるべし其身而走るとき貯ふべき者は此中に在り其他の金錢は夙に思ふ所ありしを以て浮邱山の西南なる半腹にて老杉十五株叢生し其形一の車蓋をなしたる林下に大石の屹立しある土中に石函に藏めて埋めあれば事ある時に用ゆべし又其身他郷に彷徨ふうちにも父が平生交りある何甲某乙は義氣あるものなれば保護を興ふべし云々といと周密に後事を示せしものなれば乃ち父の遺命に隨ひ甘傑に助けられ夜に紛れて家を出て駿馬に鞭ち早や七八里を走りしなり然るに甘傑は後より行李を準備して駈け來り此處にて出會ひしとぞ知るべし

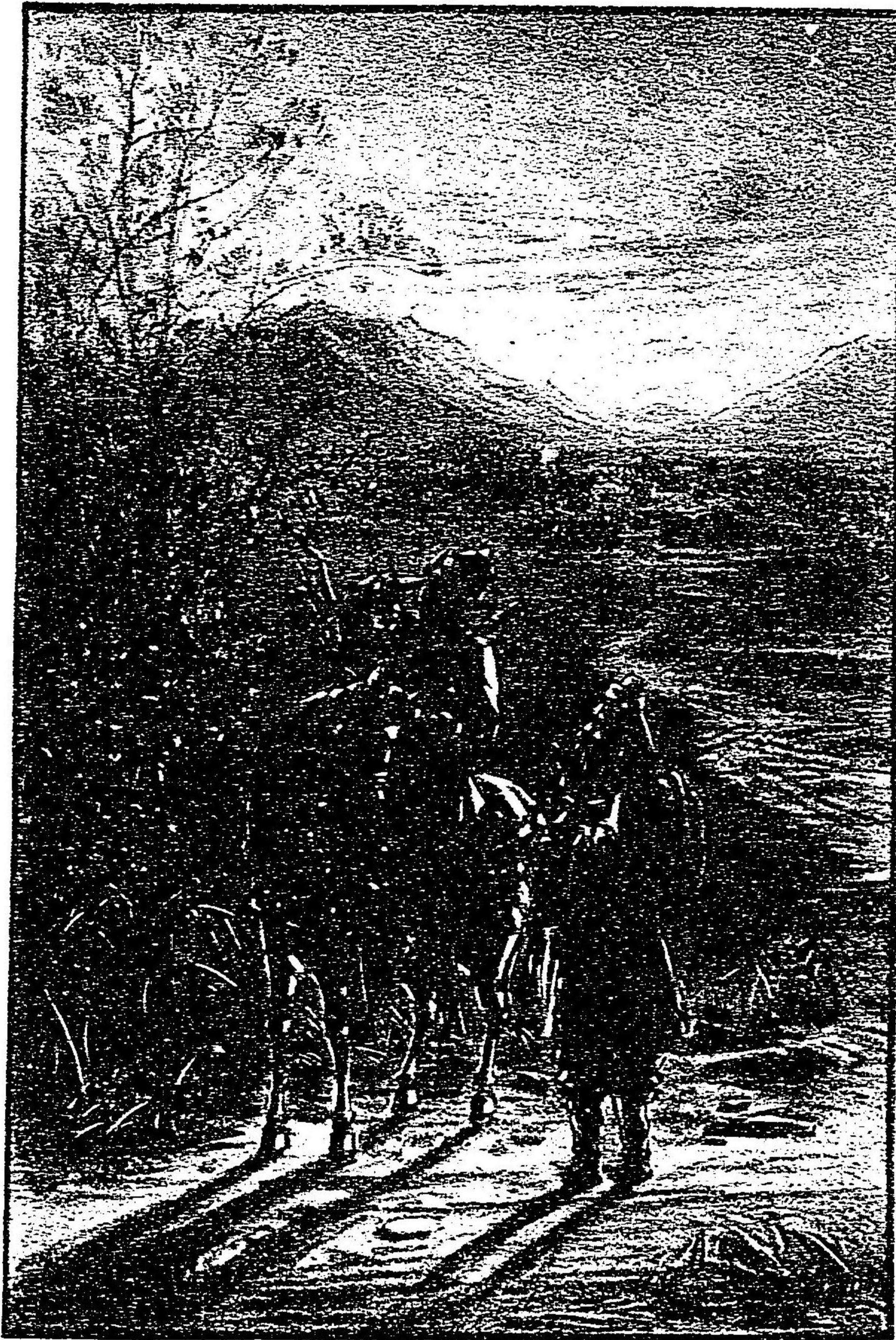
甘傑は馬の轡を控へてありしかばふり落つる涙を拂ひ
健氣なる御決心誠に得難き孝義の精神斯く知るうゑは
小夫御供仕り御先途を見届けん伴ひたまへ随ひまいら
せん

と頼りに乞ふて止まざるに瓊英は頭を掉り

否とよ汝の我に随ふは双方に不利なりとの思はせや汝
今亡命せば汝の經歷も爲めに露顯し叔父君及び雍秦は
遂に獄卒の管下に死なん汝が敵中にあるこそ幸ひ後來
復讐の便宜も多し假令此身に從ふとも互ひに煩累を増
すのみにて決して利益あるとなし我は單身獨行にて進
退自在ならざるべからむ我已に分別あり疾く去らざん
ば追手の來らんも測られむ早く濬縣の境を出でざんば

父の遺命も書餅とならん

と言ふより早く一鞭あてて駈け出せば疾きと宛ながら電
の如く忽ち影も見へざなりぬ甘傑は呆然として暫し木立
してありしが漸くに思ひ返し原と來し路へと立ち去りけ
り



第六回

一身多難虎爲鼠
四海幾人蛇作龍

嘉靖二十九年の四月中浣楊士龍は多年の宿望を遂げんため父母に別れ家を出て長き旅路に上りしが思ふ所あるにより先づ保定府へと志して急ぎしかば日ならむ府城に到着せり抑も保定府は東は河間府靜海縣の界に達し西は山西大同縣廣昌縣の界に至る其間何れも三百里許にして南は眞定府安平縣に界して其間一百二十里北は順天府涿州に接して二百里府治より京師に至る三百五十里なりと云ふ古へ禹貢冀州の域にして戰國の時は趙も屬し秦もありては上谷鉅鹿二郡の地漢には涿郡及び信都中山國の地范陽高陽中山安平河間の地隋には上谷博陵河間の三郡唐の時に至りて易定滿瀋州等に屬し五代には晋割て契丹に屬

し秦州を置き後州治を蒲城に移して舊城は清苑縣となま
たり宋の時は保塞軍保州、金には中都元の初め保州と云ひ
尋て改めて順天路となし後又改めて保定路と云ふ大明の
洪武元年改めて保定府となす、州を領する三縣を領する十
七、臨城四野、地址坦平にして二川交も流れて州治を繞り、易
水東に在り、孔山北に在り、三關重地以て幽薊を控へたり、北
京より山西河南に至るもの皆路を此に取るを以て旅客輻
湊し至つて繁昌の地なり風俗は純樸にして浮華の習ひな
く士民勁勇にして學藝に志すもの多し其生を輕し義を尙
ふは猶ほ荆軻の遺風を存せり、自古燕趙は慷慨悲歌の士多
しと云ふも亦其謂れ無きに非ず楊士龍は城内なる或る旅
館に宿し日々城の内外を逍遙し先つ保定府學を一覽せば

やと導者^{マシシマ}を備ひ彼の有名なる郝程の孔子の廟碑を拜し處
々の名園舊跡に杖を曳き其間數多の士人に接して旁ら其
風俗を探り人情を尋ね往々悲歌慷慨の遺風あるを見て昔
荆軻が秦に入りて咸陽宮に秦王を刺せしとを想ひ起して
不圖其心に浮ひたるは荆軻が蓋世の勇を以て天下の利ヒ
首を持し唯一人を相手にしながら事を遂ぐる能はさりし
は後に魯勾踐が評せし如く彼れ全く刺劍の術を講せざる
によるのみ我は如何なる場合にても刺客暗殺の如き卑怯
の手段を用ゆるの意なしと雖も己に劍を帯ひて護身に備
へたれは之れを用ゆるの術を知らざるべからざる我實父は
擊劍の術に長し容城雄縣の間には今も父の術を傳へたる
ものありしと聞けは是れより二縣の内に於て然るべき師

思軒曰一十國發學
劍之志耳而先由燕
趙出悲歌之士由非
歌之士出荆軻由荆
軻出指胸不成然後
出魯勾踐之評而始
臨宿本意看他筆々
曲折而來

を求めんと初めて志を定めけりされども猶ほ思ふ旨あれ
ば府城を立ち去らざしてありしが一日臨瀟亭に遊カナタひ彼方
此方と逍遙し世上の騷客が思ひくコナタに壁に題せる詩詞を
見て坐るに旅情を慰めけり抑も此臨瀟亭といへるは雞水
の上りにありて殊に風致あり元の時代に建築せるものに
て澄澗簾帷を浸し魚遊き鳥翔り頗る幽静の境にして城市
の置塵中よ於て別天地を開きたる仙區なり左れば楊雲は
亭畔の一室に憩ひ恰かも坐禪の僧の如く胸間一點の塵を
留めず天趣の妙境を占め得て我れ亦我あるを念れたり折
から隣室に入ありて何事か私語く聲の調子漸く高かりし
かば其音忽ち耳を穿ちて始めて静寂を破り人間の聲音再
ひ聽官を鼓動して手に取る如く談話の洩れ來るを心とも

なく打ち聴くに頻りに馬忠と呼ぶ聲す楊雲は耳を傾け逐
一に其話を聽き取りて左あらぬ体にもてなし静かに其室
を立ち去りけり其日も既に暮れ果て、數多の遊客は散し
盡し幽静閑雅なりし晝間の風致は何時の間にか荒涼凄蒼
たる夜景に變し皆其趣を改め市巷に近き高樓より微かよ
響く琴音は風に随つて水に落つ此時池の南隅に當りて一
叢茂き樹の間を押し分け一人の醉漢を擔ひ出て星光の葉
末を穿ちて閃々と洩れ來る明を便りに足塙を計りて昇き
御したる二人の蒼頭阿玄汝は先程の繩を持ち來れりやと
一人が問へば一人は點頭きて腰を探り小亭を昇き出す時
彼所に取り落せしと覺へたり折カシコり惡しと眩きながら汝は
此處に番して居やれ一走りに取り來らんと言ひ捨て、原

と來し路に引き返せり此時又一箇の壯士ありて樹間より五尺餘りの棒を携へて立ち現はれ醉漢の側に停立たる蒼頭をしたゝかに撃ちければアツと叫びて斃るゝを猶ほ亂撃に打ち据へて繩に息の根の通ふ斗りなるを見濟まし更らに身を横へて醉漢の傍へに在りけるに先きに立ち去りし蒼頭は返り來りて元丁其處にかと聲かけて進み寄らんとする所を眞向目懸け微塵になれと撃ち下したる棒の下に聲をも立てて斃れけり壯士は立寄り斃れし蒼頭には目も懸けぞ正体なく伏し仆れたる醉漢を引き起し肩に引きかけ何處ともなく立ち去りしは不敵なりける舉動なり旅館と覺しき家の結構なれとも夜陰のとなれば室内の模様は細かに知られぞ唯見る樓上の一室を内より固く鎖し

龍溪曰く不規則の三字下し得て絶妙、其下、埋むの一字亦た能く人をして絶倒せしむ、相貌を寫すの妙、早く其の性行を露呈し來る

て孤燈に對し何事をか物語りある二箇の者あり一人は年紀三十四五と思ほしく相貌逞ましく勇壯の氣眉宇に溢れ不規則に生ひ茂りたる鬚鬣は顔の半面を埋め眼光炯々として物を見るとの忙しきは短氣の證候と見てとるべし今一人は廿年斗りの少年にて其容顏の全部は將さに幼稚の蒼を辭し成童の花將さよ開かんとする時に現はるべき光澤を帯びたりと雖も眉目の間には往々思慮分別に富める強壯の人に見らるべき風采を呈したり是れ夕暮夜の間に臨漪亭の畔りにて二箇の脱漢を打ち仆して醉漢を救ひ出せる少年にて則ち是れ別人ならぞ前きの日より此の客舎に逗留せる楊雲字士龍あり客は楊雲が救ひ出せる醉漢にて蘇州の人氏姓は馬名は忠字は知節と呼へる壯士なり

孤多云伯夷一句着
來抄經

楊雲が如何なる縁故により危境に入りて馬忠を救ひ出せ
るにや原來此馬忠は世に知られたる劍客なるが剛直にし
て惡を惡むとは伯夷の流義を遙かに通り過ぎて幾んど其
極點に達し人の不善を爲し不義を行ふを見れば已れ其事
は關からざるも自ら辱を受けたるが如く直ちに其人を懲
し甚しきは其性命を絶つに至る左れば到る處強を挫き弱
を扶け俠名江湖より高く久しく濬縣なる魯家に寄食せしが
山東に遊歴せんとして四五月前に立ち去りしに頃日山東よ
り此地へ來り城市を徘徊せるうち陳文仲といへる豪紳顯
家の威を假り頻りに意を恣まゝにして弱を凌ぎ良家の少
女と雖も己れの心に適ふものあれば強て其爺媪に逼り納
れて妾となし若し承允せされば無頼の兇漢に吩咐けて劫

畧す等傍若無人の振舞あるも人々之れに忤へば不可思儀
の祟りあるを懼れ何れも避けて途を讓るの有様なりしか
ば陳文仲は益暴横を極め城外なる郷紳孫遠字は玄通とい
へる者の娘紅霞の姿色あるを聞き數次人を以て貰ひ受け
たき旨を言ひ入れたれども孫遠は陳文仲の爲人を鄙み峻
く拒みて其請に應せざりしに陳文仲は痛く怨み顯家の威
を籍りて逼りしかと孫遠固より正直の君子なれば此れさ
へ痛く拒絶したるにや文仲は愈益兇漢に金を與へて峻
逼し紅霞が外出したるを窺ひ奪取らんとしける處に馬
忠が行き合せて兇漢を打伏せ扶けて其家に送り遣りしか
ば陳文仲は再三失敗して耻辱を取りしに益憤り腹心の兇
漢に吩咐け武藝の子弟となるべき体に言ひ做して馬忠に

近づき臨瀆亭に誘ひ出して毒酒を借め其昏倒せる時人知れず喪はんと計れるよしを楊雲委細に聽き取りければ陰かに其場に赴き二兎を仆し馬忠を救ひ出して己れの旅館に伴ひ解毒の薬を用ひ其精神の恢復せるを待ち其始末を語り聞かせたるに馬忠は再生の恩を謝して頻りに楊雲の勇氣を賛揚すれども其心中には楊雲の年少なるも其容貌の都雅なるを見て勇壯の男兒にはあらざと認め又己れが劍法に妙を得て勇力あると其年齢の負かに楊雲より長したるを負んで自ら相手を視下たすの趣ありされども現在其身の危急を救ひし恩義には敵し難く意を曲けて一步を譲れども猶ほ其心中には此兎の骨格は自然に強壯の資を備へたり末頼もしき少年なり我れ能く教導せば天晴れ

思軒曰如聞其厚則
如見其人

の勇士となるべし不圖せしとより好き門弟をば得たりと思ひ遂に其身は此少年よりも上位に居るものなりと信し彼の恩に感せしより生したる尊敬の念は漸く其胸中より消散せり馬忠は突然楊雲に向ひ
少年汝は劍法を誰れに學ひたるか彼二兎を打ち仆したるは如何なる術を用ひしや
とさも横柄に問ひければ楊雲は熟ら其顔を視詰めて笑を帯ひ
否誰れにも學ひしとなし今より學はんと思ふなり
馬 全く劍法を知らずしては年少の弱腕にて二人を相手に
勤くとは出来ぬものなり隠すに及ばば吾に告げよ
揚 其は急くとははあらず足下は今僅かに蘇生したるまで

孤峯云楊雲胸中唯
有國家而已

なり足下は一髪の間死を免れたり某が二兎を仆した
るも亦容易ならぬとなり足下の話によれと陳文仲とや
らんも悪事にかけては抜目なき奴なり彼れ顯家と連結
して事を爲すと云へば頗る根柢あるものと察せらる然
らば此後何等の禍を醸もすも測られぬ兎に角後圖を爲
さではれ互ひに如何なる難義を受けんも知れぬ國家の
大事にかけては身を棄つるともあるべけれど高が一婦
人の遣り取りより起れる喧嘩にて大事の身を危地に置
くは得策にあらぬ足下は此地の事情にも精しと思へば
篤と計議せんと存するなり
と恰も長者が少年を訓諭するが如き語氣にて落ち付き拂
つて語りけるに馬忠は將さに狂ひ出さんとす馬が修練

又云正是性理論如
此適合遂不落理實

の手綱にて急に牽制せられたるが如く口を開きしまゝ目
を睨りてありし惟ふに馬忠は臨漪亭にて酔倒せし後は何
事をも知らざりしに少年の旅館にて喚ひ生けられ初めて
其身の一命を救はれたるを知り先づ其心を動かしたるは
少年の恩徳なり其恩徳の大なるを思ふて不圖少年の姓名
を知り其身を助けたるの好意を思ひ随つて少年の勇氣に
心付き次て其勇氣を顯はしたる伎倆に思ひ到り遂に其得
意なる劍法に思想を向けて自己の伎倆の世に勝れたるを
自負するの餘り其心は劍法の問題に全占せられ其思想の
相連串して此に至るの間は悪人等の所業を惡むの念も未
だ生出するの暇あらざりしに今楊雲より陳文仲の暴惡を
把りて耳孔に投げ込まれ一念忽ち胸に逼りて怒火面上に

燃へ出て、惡鬼の如き、狀貌にて、「奴儂」と言ひさま席を蹴立て、飛ひ出さんとするに、楊雲は遽て、袂をひかへしに馬忠は恰から疾風の如く勢銳く駈け出たす途端に袂は切斷れて楊雲は後へに下ウと仆れしを見向きもやらざ一散走りに出て行きぬ

龍溪曰く、叙事体を

以て人の意中を説く者、則ち是れ東洋小説の慣手、獨語を以て人の胸裏を示す者、則ち是れ西洋小説の長所、湯子獨語の一段乃ち東西の文趣、一變の處

第七回

可憐天上張公子
堪愛雲間陸士龍

楊雲は起き直り其心に思ふやう彼は必定陳文仲に讎を報せんため駈け出せしなるべし我れ此の土地に不案内なれば陳文仲の家は何れにあるを知らず人に問はゞ知るよしもあらんが其等の事に際とらば彼は早くも事を惹き出すべしと案じ煩ひてありしが不圖孫遠が事を思ひ出し彼が家は孫家村にありと聞きつれば訪ひ行きて熟議の上事を處そべし假令今より馬忠の跡を躡ふとも急の場合には間に合ふまじと思ひ入りて見ぬたるが忽ちに意を轉せしと見ぬ微笑しつゝ獨語

我ながら周章たり孤身を以て百事を主裁せんとするも
遂げ得べきとにあらす渾べて自然に放任して我は吾が

孤峯云人生快事在
事物變動真個英傑
之言

行ひ得べき路より進むべし彼れ命あらば再び會ふの時
あるべし彼れ若し陳家を闢かして變事あらば反つて新
局面を開くとなきにあらす人生の快事は物の變動する
より生ずべきものなるに彼れは氣を以て世を壓せん
す我は智を用ひて業を遂げんとす我今彼れを追躡せば
我智は彼の氣に制せらるゝなり止みなんく夜の明る
に間もあるまじ心身痛く疲れたり暫しの間枕に此身を
托すべし

斯くて其手に残りし衣片を投棄て徐かに起て寢入りし
が忽ちスヤ／＼と眠りたり翌日夢覺めて起き出れば日は
高く昇りてはや正午にも近き時刻なるに予楊雲は打ち驚
き緊要事件の一身に集湊したるに心身の疲勞とはいへ餘

孤峯云自然脚紳之
莊院叙得有景致

りに寐過したりと眩きながら盥嗽して直ちに食を喫し劇
しく身支度なし客舎を出て、行く／＼道を問ひ孫家村に
入り但見れば一脉の河流を前にせる一構への莊院あり大
なる石橋を架して直ちに其正門に通じ幾株の高木河岸の
東西に繁りあひ四方築垣の内に大厦高樓甍を列べて宏壯
を極めたり楊雲は門に入りて案内を乞ひ某は容城の士人
にて楊士龍と呼べるもの急に御主人に面談致したき譯あ
りて参れりと名刺を出して謁を乞ふに家宰と覺しき者出
で來りて今朝遠來の客ありて家内に取込みあれば主人は
面會致し難しと謝絶するを楊雲は押し返へし

某が今日貴家を訪ふて御主人に謁を乞ふは決して自己
の便宜にあらず貴家に連なる變事ありて大に貴家の利

害に係はるとあるがゆゑに御主人に面請して商量せんと存ずるのみ更めて御主人に傳へられよ
 と言へるに家宰は其人品骨相の高峻して貴公子なるを見取り然らば主人に告げまいらせんと直ちに内に入りしがやがて出で來りて主人義内事に取り紛れて痛く敬禮を失へり直ちに拜顔すべし暫し待たせたまへと言ひながら廳前に誘引せり暫くして主翁孫遠出で來りて楊雲の前面に坐したり主翁は年纔五十許龍眉鳳目鬚鬢長く垂れて殊に美はしく一見して其温厚長者なるを知るべし楊雲は初對面の辭儀を演べ且つ推して面請を乞ひし非禮を謝して言ふやう

晩生高門を叩くと素と老先生の家事に關せり老先生は

孤豎云間馬忠一語可味

馬忠の近狀を御承知ありしや
 と問ひけるに孫遠は打ち驚き
 今日遠來の客ありてまた馬忠の事を老夫に訪へり彼れは數日前に來りしが其後は何の消息もなしされども彼の宿房は此より程遠からぬ藺若の中に在れば直ちに其狀を知るを得んざるにても貴客が老夫の家事に係はる事故ありと言はるゝ譯は何か馬忠に對しての事なりや
 さればなり某は仔細ありて單身天下を遊歴するものなり先頃府城に入りて已に三四旬に及べるが昨日臨瀟亭に遊び不圖馬忠が令愛を救ひしとより怨を陳文仲に結びたる由を聽き取れり
 と語緒を開き夫より文仲に謀られて毒酒を飲み幾んど死

に至るを救ひ出して己れの旅寓に伴れ歸りしが俄かに怒を發して駈け出せし始終顛末を告げ

右の譯にて馬忠は今己に如何なるとをなせしや又如何になりしや孫晚生其狀を知るよし無し彼れ極めて短氣なれば必ず大事を惹き出せしならん孫晚生單身にて事を謀るの力なし老先生の事は往き馬忠に聞き置きたり且つは陳氏に何事の有りしにせよ老先生には早晚多少の繁累を持ち來たすに相違なき關係あれば此事を告げて一面は馬忠を救ふの方便を求め一面は老先生が早く冠に對する準備に供せんと存じて推參せり

孫其は意外の珍事なり馬忠は剛直の士にして殊に我家に徳あり老夫いかで力を盡さるべき唯急遽の際なれば

先づ何れより手を下さすべきや思案も定まらず貴客の高見は如何

楊晚生とても別に考案なし但心敏きたる者を兩人撰み出して一人は陳氏の近傍にて昨夜何事の有りしを密かに探らしめ一人は馬忠の宿房に到りて彼が昨夜歸りしや否を問はしめ其返報を待つて臨機に事を處するの外は候おまじ

孫實に尤なり然らば左様に計はんと言ひつゝ直ちに内に入りやがて二人の蒼頭を呼び來りて楊雲に紹介し楊雲の言ふがまゝに命令けて出し遣りし後にて孫遠は楊雲に對して容を改め

馬忠が事は其れにて好し甚だ唐突の至りなれども貴客

孤峰云臨機之一語
以見其爲智謀之士

に尋ね度一事あり願くは包まず御話しありたし貴客は容城の人にて楊氏と宣へり若しや楊椒山に由縁ある人に在わさずや

然り楊繼盛の男に候ふ老先生は愚父を識りたまへるか朋友と云ふも近頃嗚呼なれども師を同ふして共に書を讀み殊に尊大人の知を辱ふせり老夫は尊大人より十歳計年長なれども尊大人とは殊に親しく交りたり三年前北京に赴きし時も尊家を訪ふて懇懇なる接遇を被れり其時令嗣の師家に寓居して家に在らざる旨を語りたまいきさてハ貴客は楊家の賢息に在はすかコレハ今日如何なる吉日にや故人の令息方が二人まで家を訪はるゝとは欣ばしきとの限りにこそ貴客は天下を遊歴

すると申されしが故らに城内の寓居を必要とする事故あるにもあるまじ陋屋の後園に一間の書房あり竹樹三面を圍み一面は溪流に對し極めて幽靜なり貴客の爲めに掃除して萬事供給せば甚だ便宜なり願くは暫し足を駐めたまへ今日遠來の一客あり餘義なき事にて老夫を便り來れり年齢は貴客よりも三四歳少かるべしされども極めて氣高き少年にて才識あり交りて悔ゆると無き人物なり相親しむの後は同居さるゝも其は亦兩君の便宜によらん

楊 御深切の思召誠に感謝に堪へず客舎の不便は已に身に馴れたれば左までに心苦しきは候はず塵囂の甚しきも心を靜かにして獨居すれば胸中に侵し來るの累もなし

されども老先生の厚愛に對し奉りて辭謝するは不敬の
至り且つは高教を仰ぐの益あり良友を得るの便もあり
身に取りて幸福此上なし高示に任せ御造作に預り奉ら
ん

と承諾したるに孫遠は大に悦び

さらば此方に來ませ魯秀才の待ち詫びしならん

と言ひつゝ楊雲を誘ふて廊下を打ち廻り高樓の上ねと伴
ひ行たり樓は南に向ひ遙かに一帶の青山に對し東は府城
に面し渺茫たる曠原を其間に望めり畫棟彫欄華麗を極め
半ば朱簾を捲いて卓子を眞中に主客對坐なしたり家人は
早くも酒食を安排して盃盤已に賓主の前に列なれり暫く
あけて家人に誘はれて此席に入り來りしは年紀十七八の

孤豎云著筆斬新
又云冷語

思軒曰士禮是篇中
男主公阿英是篇中
女主人公今案在於一
室双美聯璧異極精
采嘗讀曲亭俠客傳
每惜其叙不到小六
騎姬照面一段而結
筆以爲缺陷今獲此
稍有所償

少年にて丰采高軒容姿都雅にして中にも復たあるま
じき美貌なり人をして天宮の佳人人間に降請せらるゝの
前天帝深く其容色によりて塵界に禍根を種んとを恐れ故
らに男子として世に現はしたるならんと想像せしむる計
りなり少年は楊雲に對つて禮を施し設けの席に就き更ら
に主人に挨拶して楊雲に紹介されんとを乞ひければ主翁
は打點き楊雲に向ひ

此れなるは濠縣の人にて魯英字は子玉と呼び世に名高
き魯邱山先生の令息なり

と言ふうち楊雲も名刺を出して名對面をなしたり主翁は
笑しげに杯を侷め猶種々の佳殺を添へて兩人を饗食ける
が少年は楊雲に向ひ

貴客は何れより何れも赴かるゝよや

揚

晩生は四方を周遊せんと志して天下を彷徨ウツロヒするものなり

足下は試に應せんとの目的にて京に出る方カタを見たるに

ヨモ誤りはあるまじ

と言ひければ少年は憂悶を帯ひたる顔色にて

揚

晩生も其志無きにあらねを誠に日暮途遠の思ひあり

足下は猶ほ青年なるに今より志を行ふは早きに過ぐる

位なり日暮途遠きとのあるべきや夙成は晩成に若かず

心長く志業を遂げたまへ

と慰なぐさ藉ければ少年は一層憂悶を増したるが如く見ゆしが

世に益友を得て平生の志を談し緩急相助けて共に身を

立るほと快事は無かるべきに晩生は故ありて士君子に

交遊乏く未だ斯る朋友を得ざるは此上もなき不幸なり

と言ひかけて主翁の方に打ち向ひ

願くは大人の庇蔭によりて世の豪傑と相親しむの便宜

を得んとを

と始終悲酸を帯びて物語るを主翁は勵まして

今纒つづかに世に出でんとするの人にありては意氣の鋭駿

なるに反して身邊の何となく寂莫なるを感ずるものな

り苟くも正義を懐いて世に立たば正義の人は皆其友と

なるべし卿きやうが人倫の大變とも云ふべき災厄に遭遇した

るは家に取りては禍の極身に取りては不幸の至りなる

べしと雖も静思して世の有様を考ふれば猶卿より不幸

の人も多かるべし近頃巖嵩の爲めに讒毀せられて禍を

孤峯云若成之語寫
出有神

蒙むるものは幾何なるを知る可らず此等と較ぶれば猶ほ慰むる種ともなるべし世人の災厄と云ひ不幸といへるものを單に自己の身に禍害を加ふるの障碍なりと思はゞ心志を沮喪するにも至らんが其れをば自己の才識を激發し鑿力を研磨するの物具なりと見做すときは災厄は自己を助け不幸は自己を勵ますの資ともならん青年の士が前途に大なる望を抱ひて其志業の途を遮る障害を恐るゝ時は何事をもなし得ざるべし

と言かけて楊雲を見返へり

楊公子左は思ほさそや
老先生の高論は晩生の身に取りても此上なき教誡なり承はれば魯君には何か禍又遭ひたまひしやの趣なるが

如何なる事變に候ふや思むべき筋の候はずば語らせたまへ斯く友垣を結びし上は晩生の身に適ふ程はお助けまいらせん

と他事なく問れて魯英は何の語もなくさし俯向ひて居たりしを見て孫遠は其心根を察し自ら代つて魯敏行が劇知縣に中られて遂に獄舎に冤死したる顛末を把りて説き終り更らに魯敏行の爲人及び平生交遊の有様等を細説し自分はず魯敏行と同學なるが爾後相往來して常に相親み敏行の浮邱山下の邸園に詣りし由縁のありしに由り往きに魯英が父の遺命によりて家を出で、より種々の艱苦を嘗めて其家に尋ね來り暫く奸徒の毒焰を避けたるうゑ先人の遺命によりて身を立るの道を求めんと趣意なると

を魯英に聞きしまゝ演述したり楊雲は聞き終りて歎息な
 し
 暗濁の世界は固より公明の人を容れざる屈平は公明の身を
 汚さしめて遂に汨羅に沈めり其情具に憫むべし雖も男子
 已に志を立て、世弊を矯めんとするに當り豈其身を潔ふ
 するを以て足れりとせんや山林に隠れて獨り其道を修
 むるも現在を見かぎりて幽冥の路に上るも皆是れ進んで
 世を制するに非ず世に制せられて自ら退くものなり吾
 曹は自ら公明の身なりと信せりされば暗濁の世に容れ
 られざるは勿論なり而して吾曹が今住める世界は不幸
 にも此暗濁なる世界なり吾曹公明の身を容れんと欲せ
 ば先づ世界の中に此公明の身を容るべき地を開拓して

孤峯云彼國有冥慨
 者多憤世入山林終
 身不能爲一事作者
 借土龍議論痛斥其
 弊

孤峯云至論至言即
 山有知宜歎服

然る後身を此に置くの外なし足下の父御が公明の身を
 以て酷吏に制せられしも誠に親易き道理にて申さば當
 然の事と云ふべし父御の住居されたる浮邱山の邸宅に
 鐵壁を築きて周圍を塞ぎ全く暗濁の世と相絶つを得た
 りしならば禍を免れしともあらんが已に知縣の進入す
 べき道を城府に通じたりしは則禍を惹くの本なりしな
 らん足下は已に大人を殺され家を滅されたり仇を報す
 るの志と家を興すの情は胸中に充滿して宇宙間の事物
 は足下の眼中に入りて皆讎敵と見ゆる斗り不快を感ず
 るならん眇然たる孤身を以て此の如きの世に立ち志を
 遂げんとするは恰も艱難の淵に身を投ずるの想あるに
 より心に發するもの悉く憂憤となりて自ら言行の間に

迸出するとならん併し今一步を進めて天下の形勢に視
察を向けられと虐政の爲めに苦められて民其生を安ん
ずると能はず萬億の蒼生皆其所を喪ふの有様なるは實
に痛ましき限りならずや是れ志士の奮ふて濟民の大任
に當り此民を塗炭に救ふの策を講せざるべからざる秋
なり一身一家の災厄に心身を惱まして徒らに鬱屈する
の時には非ず

と例の峻爽なる語氣にて説き出せしに孫遠も魯英も其雄
辯に氣を奪はれ未だ其論の是非を判断するに及はざるう
ち楊雲は更らに語を繼ぎ

吾曹の志業は斯民を如何にすべきやと云ふの一事に存
せり民其所を得て生を樂むの時に遭はば吾曹は劍を賣

龍溪曰く管劍買山
の境、則ち胸裏の
洒落を見る

孤琴云孟軻氏は全
眞操索

りて續に易へ山に入りて獨り樂むともあるべしされど
も斯民塗炭に苦み皆其生を安んせざるの時に遇はば我
身は決して世外に退くべからず濟民の大任を負擔する
は止むを得ざるとなり扱此大任に當らんものは固より
艱難痛苦を甘受せざる可らず孟軻氏言はずや天將降大
任於是人也必先苦其心志勞其筋骨餓其體膚空乏其身拂
亂其所爲所以動心忍性增益其所不能と魯君若し某と志
を同ふせば願くは廣く志士を天下に求め共に濟民の策
を講せられんとを

と肺腑を披きて打ち解けたる語に孫遠も嗟嘆して
秀才の卓見説き得て妙なり眞に是れ大勇と申すべし士
の山林に隠るゝは常に否運の時にあり是れ唯自ら潔ふ

するのみ否運の時勢を一變して澤を民に降さんとする
は誠に聖賢の志なり老夫の如き少壯の時すら人に若か
ず今は驚馬の老いたるものにて用ゆる所なしと雖も相
助けて共に心を談ずるの友とならん

と言ひ終りて魯英を見返へれば魯英も最前よりの議論に
感動されて鬱結せる胸裏の黯雲に微駭を生せしと見へ朱
脣の間より纖細なる眞珠を微かに現はし眼波に笑容を浮
べて楊雲の方に振り向き

楊君の高論は晩生の迷霧を拂ひ白日青天を見るの想あ
らしめたり今より驥尾に附て共事爲さんと思ふに
附けても先づ孝子たるの道を全ふして然後國事に盡す
ころ順道ならん且つ晩生は

孤夢云著色織羅如
見其人

と言ひかけしが何か憚るとのありしにや暫し猶豫したる
折り往きに馬忠の許に遣はしたりし蒼頭歸り來りて申す
やう馬忠は其宿房に在りて昨夜以來病に犯され困臥せる
模様なりしゆへ楊相公より申されしとを把りて尋問せし
に彼人も切齒しながら昨夜一圖に仇を報せんと駈け出だ
せしに如何なる故にや途中にて眩暈甚しく手足も麻れて
忽ち地上に昏倒したるに折り能く假寓せる蘭若の僧徒二
人通りかゝり月光に照らして相識の人なればとて扶けて
僑寓に歸り今朝に至りて僅かに手足の痲は去りしかと猶
頭痛甚しく行歩も自由ならざるよしを告げられたりと陳
べ終りし時陳文仲の近傍に遣はしたる一人も歸り來りて
彼れが家には何事もあらざりしとを演べたりける此時楊

龍溪曰く世車動も
すれは斯の如し多
く世故を經たる者
獨り之を知る、事
理以外の一語、蓋
し鳴鶴兄平生の感

雲は手を打ちて感嘆し

人事の定まり無きと斯くの如し吾曹が智慮ありげに前途を推考して斯る成果に歸すべしと思へるものは多くは空想となる吾曹は事理を推して算定するも事理以外に起る事變は常に一人の思想にて定めたる推算を顛倒するものなり昨夜彼れが駈け出せしは某が推測に違はず復讎をなさんとの目途なりしも途中にて昏倒すると
は某が何程に考ふるも思ひ寄らざる所なり惟ふに彼れ一時に發上せる怒氣に激されて毒酒の餘力を引き揚げ悶絶したるならんされども彼が病氣は却て其身の幸にて天彼れを助け吾曹の累を解きしなり彼の脚の立たざる前に此處に呼び取り老先生より御説諭ありたきとな

り

と言ひつゝ微笑めば孫遠も莞爾として

所謂怪我の功名ならん然らば明早朝人を遣りて此方に呼び取るべしさて兩君は通家も同様なれば荆妻并に愚女にも一回御目を賜はりたし

と言ひつゝ自ら樓を下り行きしが暫くありて夫人と家嬢を携へて進み來れり夫人趙氏年紀四十五六阿嬢は紅霞と呼び容顏麗はしく家庭の教訓嚴重にして殊更男女の別を正ふする平素の薰陶は初對面の人に對しては一應の挨拶さへも爲し得ざるまでに行き届きたれば其席に入りて笑釋なしたるのみ其後は唯さし俯向ひて語もなく偏に母夫人に頼りすがらし風情にて母夫人の代つて楊魯二公子に

孤峯云叙事曲折不用意而三人之真態悉露矣

物語るに任せたる状は梨花の蔭に咲き出でし海棠の日光に照されいと懶けに見ゆる計りなり楊雲は是れまで少き婦人の側にて物言ひかわせし事なければ流石に臆面無き快豁の壯士も己れの智慮にては其出沒を測り知られざる妖魔にでも出會ひし如く氣憶くれて見へたり其れには引きかへ魯英は平氣にて寧ろ男女の別といへる鬪をば踐み越ひしと思はるゝまで打ち解けて趙夫人に語をかはしいと羞らいて深紅に染めなせし顔をあげて時々斜めに秋波を魯英の方に注きたる家嬢にも此方より語をかけ女紅の事など話し居たり蓋し魯英は落地以來男裝をなし男子の間に混せしと雖も其家に在りしときは常に王夫人及び腰婢にのみ接して全く婦女子たるの習性を失はず自己も

思軒曰借茅一苗

亦婦人たるを心にかけつゝ成長するに隨ひ其男裝をなすを耻らふに至りし程なれば男子の間に混上ては勉めて氣を勵まし應接するも婦人の中に混しては其本然の習性に返り自ら男子として別を婦女子に立つべき境界を知らざる識らず踐み出すものなるべし此時楊雲は孫遠に打ち向ひ

晚生は今より馬忠を訪ひ彼れが逸早く粗暴の舉をなすを制し伴ふて此に來り老先生の懇諭を接せしめんと存するなり直に御暇を賜はりたし

と言ひつゝ起たんとするを孫遠は押止め
馬忠が宿所は此處より三四里も隔てり夜に入りて不案内の路次を行くは宜しうらず彼れ猶ほ行歩も自由なら

すとのとなれば明日行くとも遅きにあらず今宵は曲げて止まりたまへ

と勸むるに楊雲も其意に任せ此間坐中の話次の途断たるを機会に家夫人は客に謝し嬢子を携へて内に入りけり主人は二人に向ひ

兩君ともに無疲勞たらんに心なく引き留め參らせたり

房子は疾く掃除を命し置きたり此方コナタに來ませ

と自ら案内して先つ楊雲の房を指し示して

兩君とも御介意あるべき筈は無けれど房子は別々なるが便宜ならんと存せしゆゑ殊更ら箇様に取り計らいた

り
と言ひつゝ魯英を伴ひ三四間離れし一室を指し

孤峯云房子亦不可無別詞々

此れは魯公子の房に備へたりイザ兩君とも静かに眠に就かれよ

と挨拶して立ち去りけり

第八回

爭先徑路机關惡
近厚說言滋味長

楊雲が孫家に住みかゝてより第三日目の午牌頃馬忠は楊雲に伴はれて孫遠の家に來り廳前に酒食を設けて主客卓を對して相坐し魯英も共に席を同ふして最前より主翁が魯英に代りて其父の酷吏の爲めに誣られて非命に死したる顛末を説きて將さに了らんとする時馬忠は毛髮逆立ち腕を振して起ち上り病の爲め身體の猶ほ自由ならざるをも打ち忘れ逆賊逆賊と連聲に叫ひながら直ちに馳せ去らんず勢なりしが行歩の自由ならざるに心附き悶へ苦んで慟哭し

思人、怒ミしたまへ某遂に思人の難に及ばず今日まで夢にも知らざりしころ愚チロカなれ某誓つて思人の爲めに仇を報

せん陳文仲も捨て置き難き奴なれども彼れは唯我私の
仇なり先つ思人の仇より報すべし我今少しく疾めりと
雖も豎子の頭を二つ三つ刎ね飛はずに何條難きとあら
ん

と言ひつゝ暇をも告げず劍を挫して立ち去らんとするに
孫遠は先つ引き留めて其短慮を戒しめければ魯英も亦馬
忠に向ひ

足下の厚情は辱けなしと雖も父の仇を報するに他人の
手を假らんとは其の願はざる所なり某已に心を決して
仇を報せんと思ひしも父の遺命モトメ黙止かたく恨を呑んで
毒焰を避け此に孫先生の教を乞へり某若し仕損せば其
時は足下が心のまゝなるべし不俱戴天の仇は某必ず報

すべし足下は暫く控へたまへ

と語の間に怒氣を帯ひ其身が不甲斐なく仇を避けて此に
來りしと思ひ蔑視して斯くは發言したりと推して言ひ出
せるを楊雲は傍へに在りて馬忠の發言は左様の意味ある
にあらず津泊洗ふが如き胸中、一の宿物なふして恩を思ふ
の發情より前後左右に顧慮もなく卒然言ひ出たせしを知
るが故徐かに魯英に打ち向ひ

魯君コノミ意に介けたまふな馬君は然る心にて言ひしにあら
ず慷慨悲憤の餘り足下の此に在せしを恣れしなり答む
べきとにはあらず又馬君は急オカ激ハヤて病軀をも顧みず遙か
に山河を隔てたる敵中に踏入らんとするは無謀にて所
謂暴虎馮河の譎りを免れず孫先生の教に隨ひ徐かに事

を謀るころ肝要ならぬ

と恰かも人を教諭するが如き態度にて言ひ出すを馬忠は聞いて立腹なし

ナニ無謀とや、ヘン、汝等如き少年の知るとならず

と叫びつゝ楊雲を睨へたり孫遠は馬忠の無禮なるを見て流石温厚の君子も此時大に怒を發し

不遜なるが馬生、四十にして二十の人あり二十にして四十の人ありとは言はずや人の智愚は年の長少に由るものかは汝が己に死したるを救ふて蘇生せしめたるは何人ぞ汝が勇武を以て誇りながら兇漢に欺かれしは汝の無謀にあらずや能く其毒計を知りて汝を必死に救ひ出せるは楊君の智謀にあらずや汝は楊君に對して己に再

孤峯云其率之人往々有此態

生の思あり加之楊君は汝が思慮なく駈け出てしを案し類ひ故意我家シカミナラスに來りて汝の爲め周旋せし信義あるを忿れたるか恩を知らざるは禽獸にも若かず楊君の智慮に富める老夫も幾んど三舍を避く我は決して少年を以て視ず師として仕へんと思ふなるに汝獨り少年となして蔑視するや

と責めければ流石剛直の馬忠も理の當然に譴られ且つ己れの常に畏敬せる孫翁が斯くまで尊信するを知り初めて氣を降し遂に楊雲は己れよりも優等の生物なりと信ずるの心と共に只管楊雲を愛敬するの情を生して思人恕したまへ某は、、、、某は、、、、と言ひ出つるを楊雲は打消して

老先生の稱揚は晩生敢て當らず唯老先生の御一言によりて或は馬君の誤解を來すあらんかと憂慮するの一事あり長者の面前にて晩生の喋々するは不遜の嫌なきにあらねど晩生の志業に害ありと信ずるが故敢て申し試みん元來人に恩を受けて之を忘れず能く其徳を記するは人間たるもの尋常の事なり能く恩徳を知りしとて左のみ褒むべきとはあらず犬馬と雖も能く其主の恩をば知れり人に恩を受けたりとて其身を棄てし之を報ふか如きは場合によりては大なる間違ひなり人間の世に盡すべき事業は恩徳に報ふより大にいて且つ重きものあり報恩を以て人の至徳とするは抑も惑へり人は固より報を望むの心を以て恩をば施さず己れの心に問ふ

孤峯云唯有此人而得爲此言

て善なりと信じて行へる事即ち他人の身に取れて恩とはなりしのみされば其報を受くると否とは我に於て何の關係もなし馬君今より某に對して恩人の稱を廢したまへ報恩の事を以て人の至徳とするが如き妄念を去りたまへ犬馬も能く報恩をはなすものなり人間は少なくとも犬馬以上の生物とならざる可らず

此議論は馬忠には少し高尚に過ぎて悟り難き所なり孫遠に取りては餘りに新奇にて其是非の判斷には充分の考慮を煩はそならん只魯英に在りては如何にも卓識家の説なりと信せしむるの價あるべし馬忠は頗りに煩悶して

我も亦男子なり劇仇陳文仲を一日も世に生かし置くは我千歳の恨なり我は決して忍ふと能はず假令諸公の解

論ありとも我は決して、、、、、決して
と言ひつゝ、憤激して起たんとするに予楊雲は徐かに馬忠
の手を押へ

心を静めて我言を聴きたまへ足下は今忍ぶ能はずと言
はずや忍ぶ能はずとは即ち事を成す能はずと云ふと同
一なり凡ろ人忍の一字をなし得て初めて所志を貫き功
業を成就す越王勾踐の呉に敗られし時勾踐は妻子を殺
し寶器を鬻き觸戰まで死せんとまで決心せりされど
も大夫種の諫を用ひ忍ぶ可らざるを忍び呉に賄ふて苟
も生きたり其會稽に囚しめられし時も自ら歎して我は
此に死せんと云へり此時亦大夫種に諫められて國に反
り身を苦め思を焦し膽を坐に置き坐臥するとき乃ち膽

思軒曰那翁第一嘗
欲字典上則去不能
一語英雄之士惟無
不語故無不忍

龍溪曰引例陳雲
の隱を懐く者ある
へしと雖も事、
本と支那に關す斯
の如くならざるを
得ざるのみ

を仰き飲食する時亦膽を嘗め人の忍び難き所を忍び二
十餘年の後初めて呉を破り會稽の耻辱を雪きたりされ
ども呉王夫差が使を遣はし哀みを乞ふに當りて勾踐は
其心に忍びずして呉王の願ひを許さんとしたるに范蠡
之を諫めて會稽之事天以越賜吳々不取今天以吳賜越々
其可逆天乎といへり勾踐遂に又忍び難きを忍て呉を滅
せり前は自ら忍び後は人に忍び唯一個の忍字もて功業
を成就ざるを得たり是れ足下の知る所なるべし張良は
漢の謀臣なり高祖を助けて天下を定めたるは即ち張良
の力なり然るに此人壯年の銳氣に激まされ博浪沙中に
秦帝を椎したるも誤りて副車に中り幾んど身を危ふし
姓名を變し辛ふして急を免れたり其事は甚た壯なるが

如きも一死の間髪を容れず而して何の成効もなしされども其後圯上の老人に會しては唯忍ひ難きに忍ひ履を取り履を捧げ三たひ辱しめられて猶ほ能く忍ひ遂に兵書を得て功業を成せり是れ亦足下の知る所なるべし杜牧之項羽を詠するの詩に勝敗兵家不可期包羞忍恥是男兒江東子弟多豪俊捲土重來未可知といへり項王之烏江を渡らんとせし時亭長船を續して江東雖小地方千里衆數十萬亦足王也と勸めしに唯忍の字爲し得ずして自殺したるを惜めるものなり何にせよ忍ふと能はそして能く功業を成したると古より其例なしされば足下が忍ふと能はずといふ功業を成すと能はずと自ら首白するに同じ能く思ふて見られよ敵の知縣の官職を帯び數百

の兵を以て自ら警衛せり殊に奸智に長けたるとは邱山先生を陥れたる手段を見ても知らるべし魯先生が平生交遊に厚きは彼も亦能く知り悉せり其劍客を養ひ志士に交りしとも蹤跡已に分明なれば彼れ自ら備ふるとも亦嚴重なるべし然るに足下は何の計策もなく單身仇を報せんとするは身を火中に投するに異ならず凡る易きを捨て、難きに就き人の忍ふ可らざるを忍んで事を行ふを眞の大丈夫とは云ふなり今足下が單身勇を奮ふて潔く仇を報し事成らば則ち憤を洩し成らそんば其場に死せんとするが如きは極めて爲し易き事なり之を引きかへ羞を包み耻を忍び功を必成に期し一發誤る無き手段を用ひて敵を仆すは甚だ難きとなり爲し難きと就

きて事を爲そを眞の大丈夫といふなり足下は無謀の
匹夫となりて功を萬一に僥倖する乎將た大丈夫の爲す
所を學んで功を必成に期せんとするか二つに一つ思案
を定めて返答あれ

と理非明白に言ひ放ては馬忠よりも孫遠魯英孰れも楊雲
の説に服し感歎の外無かりけり馬忠は楊雲が耐忍の難き
を説くの一言に激まされ其身の常に大丈夫たるの行爲に
耻ぢざらんと心懸けたる矢先きに斯説を耳食して己れが
短慮疾急なる性を掩めて唯何事にも忍耐を極め其身に爲
し難きとに力を盡すを眞の大丈夫なりと信したりしが己
れ自ら學識なく事物の變化轉動に會ふて其利害得失を裁
斷すると能はざるは勿論其大丈夫となるの行爲を誤らん

孤峯云至此馬忠遂
樹降旗

とを恐れ楊雲の説き聽かせしを千古不易の金言と信する
の餘り遂に楊雲を視て己れを大丈夫とするの路徑を案内
する指南車の如くに思ひ取り是れよりは唯楊雲を尊信し
何事にあれ其意を承け其言に従て事を行ふに至れり

第九回

畫欄明月催更漏
病葉狂花半綺筵

孫遠の妻趙氏の妹子は荀安字は士道といへる人に嫁して一男一女を設け男は荀堅字は師仁と呼び女は寶珠と名く荀安は孫遠と同年なるが孫遠は早くも勇退し家産に裕かなるまゝ家居して情を風月に寓せ閑靜に世を渡りしも荀安は朝綱の紊れて奸邪事を専らにするに心付きたるを爲人因循にて決斷に乏しく孫遠と進退を共にする能はず往きに慶都の知縣に補せられて牧民の職にあり子息師仁は此程まで京師に留まりて修業したるが半月前父母を任地に省志伯母の家は縣治より里程も近けれと昨日此處に來りしに孫遠夫婦ははるく甥の訪ひ來りしを打ち悦び山海の珍味を盡して饗應し折節家に逗留せる楊雲魯英馬忠

にも紹介せ何れも通家に均しき間柄なればとて夫人嬢子も高堂に打集ひ各々歡を盡しけり時は臘月の初に當り凍雲野に垂れ朔風林を鳴らし墻頭の雪は凍つて水晶の如く朱簾畫檻に掩映して光明を發ち籬邊の梅は瘦せて玉骨を現し南枝纒か二三輪の蕾を破りしありて幽かに清香を送り來れる一室の中には新來の賓客に對して人々京師の近狀を聞きなすと當時楊繼盛の清聲朝野に隠れなければ苟堅も其名を慕ひ兼て父と交りあるにより楊繼盛に面接して教を受くると四五回に及びたれば楊家の事情をも畧ほ知り得たり楊雲は又久しく京師を離れて父母の安否を知らでありしに今苟堅の來りて具さに京師の事情と父の起居を話すを打ち聽き恰かも家信に接せし如き想をなして

坐るに懷舊の情を催ふしいとと親しく語らいけり苟堅は方今嚴嵩父子朝政を専らにして事細大となく父子の隨意に執行するをもて京師にて人々大丞相小丞相の綽號を親子に附けて相唱ふるに至りし事をも密めき語るを聞き居たりし孫遠始め何れも嘆息してありしが馬忠は忽ち眼を瞑らし

逆賊嚴嵩我能く汝の肉を食はん

と躍り上りて劍を接し坐中を睨らまへたる氣勢に今まで席上の花となりて賓主の間に可憐の愛嬌を添へたりし女性達は悸き恐れて忽ち内に逃げ入りけり紅霞嬢は先程より坐中の最も年少き一人に秋波を注ぎ思ひあり氣に見ゑたるが馬忠の叫聲に驚かされ心を遣して逃げ去りしハ黄

思野日情茅二苗

鶯樹頭に嬌音を弄せんとする時忽ち蒼鷹の羽聲に恐れて
飛び去りしが如し一坐全く和氣を失ふて殺氣紛々たり馬
忠の嚴嵩の事を聴き己れ直ちに汚辱を加へられたるが如
く劇仇陳文仲に對して發したる忿怒の上に嚴嵩父子に對
する忿怒を加へたれば今の其激昂も前に三倍して見えた
りされども今までの如く其發情の時直ちに決行の途に上
らず只管楊雲の動靜を窺ふて如何すべきと猶豫するも
のゝ如し楊雲の徐かに聲をかけ

足下は何を爲さんと思ふや

馬 天に代りて賊を誅せんと思ふのみ

楊 天に代りたる甚た好し但し必成の心算ありてのとか

馬 ナニ必成とや何ぞ必しも、、、、必成、、、、豫

孤峯云各個問答寫
得有氣勢以見老練
之筆力

しめ其れを

と言ひかけて何か思ふ所あるが如きも其思ひを纏め議論
となして言ひ出すと能はざるの有様なるを見て取りて楊
雲の

足下の事を爲すに豫しめ必成の定算あるを要せず一
身を犠牲となし命を天に任せて一擲を試みるに若かず
成否は初より問ふべきとにあらすと云ふんと欲するに
あらずや

馬 忠の今自己が言ふんと欲して言ふと能はざる所を楊雲
に前知されて呆氣に取られ彼れ何等の奇術あれば我腦子
裏を斯くまでに見抜きたるやと疑ひながら「然りと答
へたり

又云鼻率之惡如見
非吾見不能寫至此

然^レり若^シ思^フも道理なり随分事機によりては豫^シしめ成否を問^フえず天命とか天運とか云へるものに打ち任せて事を決行するとあり某とても終始斯る事を爲すまじとは言ひ難しされども今日は未だ足下が成否を問はずして事を行はんとするの場合にはあらず足下は一個の男子として事を爲すに必要な勇氣を充分に備へたり足下と常に其勇を使^フて萬事を裁理せんと思へられども足下の勇も亦た無^ク盡^ス藏^シにはあらず之を費やすと多ければ遂に竭^ス盡^スするの時あり故^ニ平生之を養ひ蓄へて一朝大に其勇を要するの時に使用せざるべからず吾曹の前途は猶ほ悠遠なるに足下が勇氣の藏を早く空^ク虚^クになすは得策と云ふ可らず萬事某に任されよ決して足下の名

龍溪曰く勇を儲る一句、是れ奇語警語

を辱しむるか如きとはなざゝるべし

と説き終りて魯英の方に振り向き

魯君は何と思ひたまふ君が仇を見捨て、暫く機會を待つも亦此心にはあらずや

と問ひかけ、るに魯英は先程より楊雲が馬忠の勇を好めるに投して巧みに勇を養ふの説を述べ今將さに狂ひ出せる奔馬を制したるに感し恰かも孟子が齊梁の君に説く時己れ先つ相手の意中を見抜きて問を設け辨論の上にて直ちに相手を生捕る筆法に思ひ至り微笑ながら答へて

他人有心我忖度之夫子之謂也

と言ひけるに孫遠も笑ひながら馬忠に向ひ

王請無好小勇夫撫劍疾視曰彼惡當我哉此匹夫之勇敵一

合 思軒曰好科謹好凌

人者也王請大之

と戯れしに馬忠も熱鐵に冷水を濺きかけられしが如く張
りつめし氣も挫けて沈黙せると同時に身体の疲勞は忽ち
全身を捕へたり楊雲も笑ひながら

曾て足下は健啖なりと聞きしに最前より見受ける所至
つて食量は少きに似たり勇氣は食物より生ずるものな
るに足下の食はざるは何事や某は早く此地を出發な
志す方に向はんと思ふなり苦しからずば足下と共に同
行せんとを願へり

と楊雲がいつに變らぬ機嫌よき語に最前よりの憤激と聲
悶を拭ひ取られ

馬 其は誠に愉快なるとなり唯今にても隨從申さん

と答へつゝ今にも出發せんとする模様なるに予傍に見て
ありし魯英は俄かに楊雲に目を注ぎ何か物言はんとなし
て言ひも出さず宛かも醫生が大病人に對つて生死の孰れ
かを判別せんが爲め脈を診する時にでも現はるゝが如き
顔色にて熟視えてあるに楊雲は氣付かず起つて馬忠の腕
を捧へて其重量を試み又其右手にて左手を持ち同しく之
を試みながら

數日の間に足下は非常な氣力を衰耗したるに似たり今
より少しく健食しく勇氣を養はれよ某は眞の馬忠と同
行すべし今は足下は馬忠に非ず足下が眞の馬忠に返る
までは某は猶此に留まるべし

と言ひ放ちたるに馬忠は失望の色あるに引きかへ魯英は

將に失はんとせむ趙壁を再ひ手に入れし如く稍々眉を開きて怡悦に心を奪はれし時彼方の翠帷を擧げて其身を窺ふものあるをも知らず楊雲を見つめたり此等の瑣事には常に冷淡にして意を留めざる楊雲の眼光は不圖帷を擧けたる物音に向ひければ其人は何れへか立ち去りしも音は猶ほ楊雲の耳に残れり魯英は楊雲に對ひ

卿は何時頃此地を發足たまふや晩生も早晩いよいよと言ひつゝ孫遠の顔色を視て何か思ふ所ありしにや暫し語を止めてありしが更らに楊雲に向ひ

晩生は君の出發するまてには教諭を受けたきともあり又肝膽を披ひて言はねばならねともあり楊某も足下と邂逅し交りを締むでより幾んど捨て難き想

長 孤峯云一句意味深

ありされども足下は足下の志あり某は又某の志あり各其志す所によりて向ふ所も異なれば暫く足下と相別れんと存するなり

と言ひつゝ孫遠は打ち向ひ

馬君の身の上につき兼て御依ト托申置きし様子は如何なりしや

孫前きに報し來りしには陳文仲の方には何の異狀もなくまた臨瀟亭にても別に變りし事もなし

楊然らば某が察する如く彼れ未だ實狀を知らざるに相違なし

是れ楊雲が臨瀟亭にて二兇を仆し馬忠を救ひし事の實跡陳文仲の方に聞ひしや否やを知らん爲め二人協議して密

かに探らせしに未だ其事の分明ならざるを相語らふもの
 なるべし是れにて主客の語も暫し途斷へたるが月光の樹
 影を移して窓紗に上りしを見て孫遠は打ち駭き
 夜は痛く深けたるに心なく諸君を引き留め申せりイザ
 眠に就くべし
 と言ひ舍て、禮をなし内に入りければ何れも席を散して
 其房舎に歸りけり

第十回

満谷和風消積雪
半窓晴日動游塵

魯英は齋中に書を讀み居たりしが忽ち卷を掩ふて嘆息せ
 り時に帷を牽けて入り來るものあり頭を擡げ其人を見て
 遠た、しく出て迎へイザ此方へと言ひつゝ、席を譲りしが
 ろの面色は蒼白に傾き其眼中は濕ふて見へたりされども
 來賓は平生其意に適ひし人と見へいと悦ばしき風情ある
 は恰かも枯槁せる草木一陽來復の候に遭ふて漸く生氣を
 回へせるか、如く、纒かに、るの、顔色に、光澤を生し來れり此客
 は即ち楊雲にていつも變はらぬ機嫌にて笑ひながら
 足下は愁魔に魅せられしならん何時も懊惱して在わす
 やう見受け申せり足下は何事を憂ひて日夜悲嘆に沈め
 るにや抑も人の憂を抱けるには其意殆んど相反するも

のあり管子に福生於憂といへり羊祜は夙夜戰慄以榮爲憂といへり惟ふに足下の憂愁は艱難窮苦より生せしならん足下の父御を失ひしは今更歎くも詮なし父御の爲めに仇を報ずるは足下が將來の事業にあり既往に遡りて引き來りし憂愁ならば愚痴と云ふものなり察する所父を喪ひ母に別れ危急身に薄り天荆地棘ともいふべき艱難の間に淪落したるより生せる憂愁なるへし果して然らん又は足下の愁苦は愚痴の甚しきものなり苦しからずば足下の爲めに一言べし徒らに辨を好むとな思ひたまひる楊齋の言に曰く人皆以飢寒爲患不知所患者正在於不飢不寒所謂飢寒は人生の艱難窮苦なり人能く艱難窮苦を嘗め盡して初めて人となるを得べし某は猶ほ青

孤峯云唯有士龍而得爲此言唯有我兄而得經此事

龍溪曰説得て痛快肚快、則ち是れ有爲男子の本色、蓋し亦た鳴鶴兄の本色

年なり今より艱難の路に上らんと思へり艱難窮苦は吾曹の心膽を煉磨する礪石なり人間終生の事業は只身を遮るの艱難を打破して通過するにありと思は、何ぞ艱難を恐るゝとあらん吾曹若し歡樂を求めんと欲せば之を得ると難きにあらず其志す所を定めず唯勢に附き利に趨りて世と共に濁り俗と共に浮沈せんのみ若し能く巧みに此事を做し得んには富貴は即ち我有なり富貴已に我に歸せば世人の所謂歡樂は求めずして至るべし然るに我に守る所ありて世と違ひ自ら甘して艱難窮苦の路に上りし上は飽くまでも艱難窮苦を求めて之を打破するを平生の事業となさんのみ足下も歡樂を捨て、艱難の途に上りしからば艱難に逢ふを本分となさざる

べからず憂愁は婦女子の事なり血性男子には憂愁なし
足下が今の身に零落したるは申さば大なる幸福なり錦
帷繡帳の間には兎角人智を消磨し氣慨を耗損するの習
風あり足下が今家の災難に遭ふて荆棘の天地に再生し
たるは所謂天助なりシテ又足下

と言ひけるに魯英は其議論に慚愧する所ありしにや將た
何か思ひ起せしとのあるにや顔赤らめ低聲にて

某は唯何となく憂愁を感じりされどもいゝいゝさり
ながら盟兄に見ゑてより何となく心強く雄壯の辯を振
ふて談論を聞き又爽快なる眉宇に接ふて慰藉せら
るゝ時は憂愁も何れか消散する心地せり某若し君に
遭遇するとあらざりせば夙く懊惱の爲めに死したるな

らん君の誠ある交誼によりて纒に生命を繋きたり其
れに就けても君は遊歴の爲め近きに此處を去るとし聞
けば相別るゝも遠きにあらず心細き限りにこそ
と言ひ終りて悄然たり楊雲は打ち笑ひ

其は又餘りに心弱し人は單獨にて在るころ好けれ殊更
足下の今の身の上に取りては愁ひに朋友あらば却て繁
累となるべし國家の事を經營するには衆人の力を頼む
と多しと雖も一身一家の事を計畫するには身一個にて
擔當するを最も妙なりとす朋友といへるものは親戚に
も増して頼もしきものなり父母妻子にさへ語らざると
も朋友には打ち明けて語るとありされども斯る朋友は
極めて得難く一朝意氣相投して友となるの後却つて己

れの煩累のみを増すの朋友あり甚しきは友を惜子とし
 て身を立つる爲め交を結ぶものあり猶是よりも甚しき
 は其友を賣りて利に趨るものあり兎角今の世の人心に
 は信義を期し難し足下も今は他人に依頼するの念を絶
 ち獨り其身に依頼して事を行ふの場合に逼れり先日よ
 りの物語にて足下は一たひ及第し志を朝に得て其權力
 を以て父御の仇を報せんと決したりと信せり明々地に
 は申されぬとも大抵は推察したり是れは至極妙案なり
 惟ふに父御より足下に遺されし計策ならん子を見ると
 は親に若かず足下は必ず登第を誤らざるべし某は兼ね
 て足下にも話せし如く父の言に背き制義の法を駁して
 試に就くを好まず唯斯民を濟ふを目的とするものなれ

孤峯云把兩人出處
 進退分明說破理義
 明白

とも足下は某と事變はり子たるの道を盡さんが爲め官
 を求むるにあれば某の志と相戻らず今日も當り唯某と
 足下と進退の異なるは足下は専ら人の子として其親に
 事あるの道を盡むにあり然るに某は國の民として其國
 を憂ふるの志を行ふにあり出處自ら同じからず進退も
 亦異なるざるを得ず右の由縁あれば暫く足下と相離れ
 て別路に就かんと思ふのみ斯く云ふものゝ足下の志す
 所急激にして危険ならば某は此に手を分つに忍びずと
 雖も足下の求むる手段は再び吾人をして相會せしむる
 の餘地を留めたりと信ずるがゆゑ某は斷然一たひ足下
 と相別るゝに決心せり友情に乏しとな思ひたまひを
 辱
 ろれ程までも盟兄の實意ある話を聞くにつけ別離を厭

思軒曰念々乃不出
此所謂思之在茲思
之在茲者

かの情はまた極めて切なり左れども盟兄の心事は能く
會得せり氣遣ひしたまふな某も決して輕忽なる事をば
なさざ又怯懦なるとも爲さじ常に盟兄あるとを心に銘
して何等の艱難辛苦をも堪へ忍び盟兄に再會するまで
は此世に在るべし
と言ひながら額に帯ひたる雲は遂に開かず目に催おせる
雨は今にも落ちんとするを笑容の間に支へて
盟兄の旅立は何日頃なりや
と問ひかけたり楊雲も魯英の厚情に心引かれ素氣なくも
言ひ放たず
成るべくは馬忠も馬忠となり健康の舊に復ざるを云ふ
魯君も魯君となり憂愁を去りて平生に反るを云ふ東帝

思軒曰情芽四萬

春を回へして人に宜き時節を俟つて途に上らんと思ふ
なり
其はまた喜ばしきとなり明晚は除夜なり春を迎ふる仕
度に劇忙しきにや幸に人も見あらず
と言ふうち意外に怪しき聲の聞ゆるに予楊雲は耳を傾
け眩きしつゝ意外をさし覗けば遠て、彼方に逃げ去りし
後影は婦人にてあかしかば楊雲は眉根を寄せて再ひ元の
席に就き
猶一つの厄難足下の身に纏はりしとを某は發見したり
ナニ厄難とや如何なる厄難なりや早く告げたまへ早く
と急き込みたる上一層憂悶を帯ひて楊雲を見返せば楊雲
は眞顔にて

龍溪曰女子にして而して男子、々々にして而して女子、迷思誤想、何等の巧核

思軒曰一句絶倒

佳、人、才、子、の、間、に、存、す、る、相、思、の、情、は、動、も、す、れ、ば、身、を、厄、難、に、陥、る、も、の、な、り

と言ひ放ちたり此時魯英は驚き惑へるが如き様子にて相思相思、、、相思とや晩生が、、、晩生は男兒なり

と言ひつゝ、眼中に一層の光明を添へ満胸の精神を双瞳に集めて楊雲が何事を言ひ出すやらんと戦々競々として見おたり楊雲は少し笑ひを含み

足下が男子なるが故に此厄難を受けたるのみ若し女子ならんには

厄難を受けずと申さるゝか如何にも女子ならんには厄難をば免かるべしされども

思軒曰情芽五莖至此一轉做恨襲來余故云恨襲情芽本一根易滋蔓處乃銷魂

足下が男子なるにより到底厄難にかゝれるなり足下は未だ心附かざるべけれど此家の令嬢は深く足下に想ひをかけたなり某が厄難といへるは即ち此事なり佳人才子に伴ふは世に得難き幸福なり某は家嬢の賢愚を知らずと雖も孫先生の庭訓に薰陶せられし婦人なりと思ふがゆゑ足下に配して耻つかしからぬ良妻とは思へり此事に就ては某は別に説を挿まされども足下が今の身の上と家嬢が一たび陳文仲に慕はれし事情とによりて將來を想像するときは此相思は足下の身にかゝる厄難となるべしと某は心配に堪へざるなり

斯く説き出すを聞き居たりし魯英は稍く心安着恰かも今身に罹れる厄難を脱したるが如き思ひをなしたるが煩悶

の爲めに蒼白に落ちたりし顔色は忽ち其色を變し須臾に
いて滿面紅を潮し夕暉眩ゆき風情なりしが其朱脣は自然
に開らけて笑を曉皆の間に收め

戯言を止めたまへ、戯言を、晩生は一時恐怖に襲はれたり
場
戯言にはあらず某は生來戯言すると能はず今足下の爲
めよ戯言よあらざるを證すべし

とて前夜馬忠の激論にて家人の内に入りし後紅霞が獨り
魯英を伺ひし舉動と又今少女の後影の見えたるを思ひ
合はずれば家嬢の相思も漸く募りて痴情の爲めに禮儀の
闕を陰ゆるに至れり幸にして亂に及ばざる前に家翁が心
を用ひて婚儀を全ふするにせよ陳文仲は必ず力を傾けて
孫家に祟るべし而して其憤恨の中心よは遂に魯英自ら當

らざる可らざる勢に逼るべしとの説を述べければ魯英も
初めて其事に思ひ到り

魯
如何にせば其厄難を免れ得べきや手段あらば教ふたま

へ

場
某とても別に良策なし若し愚意に従は、足下暫く此家
を去るに若かず某も夙く此を去らんと思ひしかと今は
積雪道路を没し行装極めて不便なれば此近地にて幽靜
の地を擇び暫し足を駐めんと前日馬忠に謀りしに馬忠
が寓居より一里斗り南に當りて小寺院あり其寺内には
數棟の淨舎ありて士人の賃房に供するもあるよしなれ
ば近きに移らんと思ひ居れり足下若し禍を避くるの意
あらば共々其處に移りたまへ馬忠も某と同居を約せり

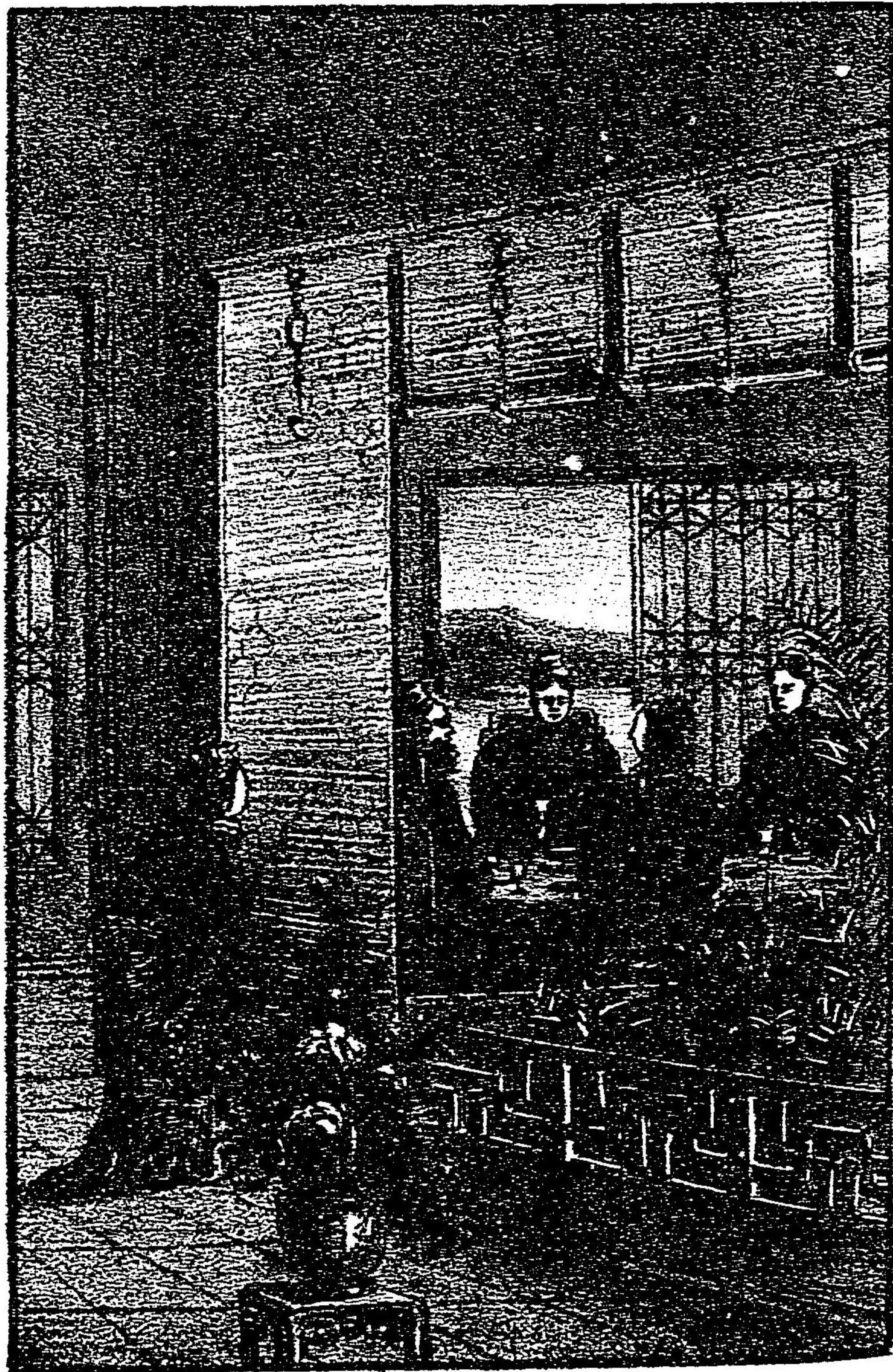
三人同時に此を去らば主翁は必ず怪むべし此れに對して某言ひ解く辭あり若し猶豫して歳除を此に移し元旦に及ひなば賀客の往來も頻繁ならん萬事につけて衆人の目に立つ廉も多からんと實は馬忠の身の上をも心配して斯くは計らぬしなり今宵某は主翁に面し委細の譯を打ち明けて明早彼地に移らんと先程馬忠を遣はしたれば準備も已に整ひつらん足下若し此家を去りて某等と共に暫く彼處に赴かば一時禍を避くるを得ん此外に思案とては候はず

此語を聞るて魯英は暫し思案に暮れて居たりしが漸く決心せる模様にて

盟兄の教諭理に當れり願ふは晩生をも伴ひたまへ馬君

へは唯何となく宜きよふに

勿論のとなり然らば某は今より主翁に計議すへしと言ひつゝ起て外方に出て行きけり



第十一回

萬古少圓唯月色
四時多恨是春心

楊雲は遙遠に辭し兼て馬忠に語らぬ置きし蕭寺に居を移しければ魯英も遙遠に謝し春初には賓客の出入も繁煩なるべければ其等の嫌疑をも避け且つは楊雲と共に書を讀み武を講せは其身を取りて此上なき便宜なりと言ひ做して楊雲馬忠と共に村隅なる寺院に赴きけり

細廬は餘り廣敞からず住僧も極めて少なく講殿經樓は荒れ果て、詣ずる人も稀れなるにや佛龕の前なる香華の煙は常に絶へくとなり只方丈の後に當れる數間の精舎は清潔にして掃除も能く行き届き牖戶牆壁纖塵を留めず食卓寢床畧ほ備はりしを見れば從來寺僧が此れを賃房となして士人に貸與し其房錢もて齋の料に充てたるものなるを

孤峯云叙事雖密是所不及

知るべし遙かに前溪より落ち来る流泉は直ちに庭前の池中に注ぎ密竹は風を弄して璧玉を敲き松は日を摩して龍蛇を起す幽邃蒼涼の景色は自ら塵寰と隔絶して人意を爽かにするの趣あり魯英は南窓に對ひ前きに折り取りし梅花を拈しながら書を繕いてあり楊雲は庭に降り立ちて馬忠は劍法を學ひ居たり此日は三人が移居してより第八日目にして即ち人日正月七日なり楊雲は劍を止めやがて魯英の前に進み

足下は梅落額を想ひ出たせしや
と問ひかけられ魯英は愕然として

晩生は女兒にあらず争てさる事を想ひ起さん
と言ひつゝ顔赤らめて俯向きたり
梅落額ハ宋ノ武帝ノ壽陽公主ノ故事ニシテ公

主人日ニ合章宮ノ簷下ニ臥シタルニ梅花額ニ落チ之ヲ拂
ハトモ去ラス後人效フテ梅花ノ粧ヲナシ人日ニハ女兒梅
粧ヲ惟ふに楊雲は暗に紅霞も今日梅花粧をなせしならん
との意を以て少年同志の戯れに言ひ出でたるに魯英は疵
持つ足の踏み損じ己れの女兒なるとを疑ひしより言ひ出
せしと思ひ斯くは羞ちらぬしなるべし楊雲は戯言をなせ
しを悔ひし面色にて馬忠の方に振り向けば馬忠は何時の
間にか酒瓶を持ち來り

往きに孫家より贈られし屠蘇酒は誰れも飲まざるにや
猶ほ七分を剩せり楊君赦したまへ僕は人日を祝して一
杯を傾くべし屠蘇にて思ひ出せしが元旦に此酒を酌む
時長幼の序を破りて幼より先きに飲むは如何なる譯の
あるとにや

思軒曰一段似露世
説

龍溪曰く問話も亦
た趣を添ゆ

と言ひかけて魯英を見願れば魯英は即坐に
少者得年故先^ニ老者失歳故後^ニ
と答ふければ楊雲は語を次きて

往昔は薬を水に浸し屠蘇酒と名けて飲むときは一歳中
温疫を病まずと言ひ傳へて之を元日に用ひしと聞きし
が今は眞の酒を用ひて屠蘇酒と呼べり酒は變化したれ
ども古例は猶存せり所謂告朔之餼羊ならん但温疫を病
まずと言ふは不稽の言なり

馬忠は巨觥に溢るゝばかり盛り來りて

今日は年長より始むべし僕に次て楊君杯を舉げたまへ
と言ひければ楊雲は微笑ながら
其は年を得るとを好ましども思はず

と眩きければ魯英もまた歎息して

晩生は諸君に比すれば年猶少けれども年を失ふの甚だ
速かなるを悲む

と打ち萎れて見ふけり楊雲も亦慨然として

志業成らず光陰徒しく逝く誠に歎息すべしされども士
は志の立たざるを憂ふ志の成らざるを憂へず

と斷然言ひ放ち馬忠に向ひ

足下の病は未だ全愈したるにあらず餘りに飲を貪るは
禍根を種ゆるに同じ少しく省慮したまへ

此時人あり扉を推して入り來り楊雲を揖して更らに馬忠
に目禮なしければ彼方にありし魯英も出て來りて皆席を
共にせり是れ孫遠の外姪荀堅字は師仁なり荀堅は一坐に

孤堂云是真英雄之
言以見士龍爲士龍